

ブロニスワフ・ピウスツキの日本滞在¹

沢田和彦*

はじめに

ポーランドの革命家にして民族学者ブロニスワフ・ピウスツキは、1866年（慶応2年）11月2日²にロシア領リトワのズーウフという町に生まれた。1887年（明治20年）、ペテルブルグ大学法学部在学中にロシア皇帝アレクサンドル三世暗殺未遂事件に連座し、サハリン島に15年（後に恩赦で10年に減刑）の徒刑となった。この牢獄の島でピウスツキはギリヤーク（ニヴフ）と樺太アイヌの言語を習得し、その民族学的調査を行った。刑期を終えた彼は、ウラジオストクの「アムール地方研究協会」の博物館勤務となる。やがてペテルブルグのロシア科学アカデミーからサハリン原住民の資料収集を委嘱され、エジソン発明の蠟管蓄音機（録音、再生に用いる蠟製の円筒）とカメラを携えて再度サハリンに向かった。ピウスツキは原住民とその文化の擁護者となり、南サハリン東海岸アイ・コタンのアイヌの酋長バフンケの姪チュフサンマとの間に一男一女をもうけた。

1905年6月、日露戦争による日本軍のサハリン占拠の直前にピウスツキは妻子を残して島を脱出し、極東ロシア、日本、アメリカを経て翌年ガリツィア（オーストリア領ポーランド）に帰った。ヨーロッパでは、しかしながら、アイヌ研究は正当に評価されず、学位をもたぬピウスツキは定職を得ることができず、困窮生活を余儀なくされた。1914年（大正3年）、彼は第一次世界大戦必至の気配を察してウィーン

へ逃れる。さらに中立国スイスへ避難し、パリに流れつく。そして1918年5月21日、セーヌ川のミラボー橋のもとで水死体となって発見された。失意と孤独と亡命生活に疲れた末の自殺とされているが、死の真相は今なお明らかではない。それは、実弟ユゼフ・ピウスツキの指揮下にポーランドが悲願の独立を達成するわずか半年前のことであった。

ブロニスワフ・ピウスツキが日本列島を訪れたのは、現在判明している限りで1902年8-9月の間の3週間、1903年7-10月の3カ月間、1905年10-11月の1月半、そして1905年12月中旬-1906年8月3日の7カ月半、の都合4回である。本稿は、第3回目と第4回目の計9カ月にわたるピウスツキの日本滞在の折りの動静を、近年発掘された数多くの資料を渉猟しつつ、できうる限り詳らかにすることを目的としている。

1 ロシア人革命家

ピウスツキは1905年10月初旬に神戸に姿を現した。これは、9月5日ポーツマスで日露講和条約が締結された直後の時期にあたる。ポーランド系ロシア人革命家ニコライ・ラッセル、本名スジローフスキイ（1850-1930）は、アメリカに亡命し、その後ハワイに帰化した。彼は、日本に送られたロシア・ポーランド俘虜兵士に革命思想を鼓吹する目的で、社会革命党系の「アメリカ・ロシア自由友の会」から派遣されて、1905年5月30日に来日し、7月5日に神戸に移った³。神戸ではその3日後に露文週刊紙

* さわだ・かずひこ

埼玉大学教養学部教授，日露関係史・ロシア文学

『日本とロシア』^{キポーニヤ・イ・ロシヤ}が出始めた。これは俘虜の慰安のために日本人正教徒が出し始めたものだが、第7号からラッセルが編集権を握り、革命思想を鼓吹する内容に変えていった。本紙は1906年1月25日発行の第16号まで続いた。そのかわらラッセルは寺内正毅陸軍大臣の許可を得て、慰問を口実にして習志野、静岡、松山、熊本、姫路、伏見の俘虜収容所を巡回し、ロシア・ポーランド兵と直接話し合った。

ピウスツキは神戸に来て、ラッセルの事務所を手伝った。サハリンでまず第一にピウスツキを探そうラッセルに忠告を与えたのは、ジェイムズ・ダグラスである⁴。このポーランド生まれのイギリス人は、日本軍に投降したポーランド兵を国外に送り出すべく、ポーランド社会党によって日本に送り込まれたものの、後には自分の使命をラッセルにおしつけて姿をくらました人物である。ラッセルはサハリンに政治囚がいることを知っており、いち早くその解放と身柄の引き受けを日本の陸軍省に陳情した。彼らのなかに自分の協力者を得たいという気持ちもあり、第一にピウスツキに白羽の矢が立ったということだろう。元「人民の意志」党執行委員会のメンバーM. N. トリゴーニによれば、1905年8月17日、政治囚はサハリンを占領した日本軍から自由の身たることを通告され、同時にラッセルの海軍大臣宛の手紙の写しを見せられたという⁵。もともと、この時点でピウスツキは既に島にはいない。

11月9日頃までラッセルのもとにいた後、ピウスツキは南サハリンのアイ・コタンの家族の元へ向かった⁶。長女キヨが12月8日に誕生する、その直前の時期である。そして11月中旬にウラジオストクへ戻った。これは、10月30日にニコライ二世の「十月詔書」が公布され、自由獲得への光明が点されたこと、日本の各紙が一斉に11月12日から13日にかけてウラジオス

トクで起こった反乱を報じたこと、また15日にかの地の上陸解禁の知らせが流れたことと無関係ではあるまい⁷。ピウスツキが11月に「アムール地方研究協会」の依頼でアムール川下流域のゴリド（ナナイ）人のもとへ資料収集に出かけたこと、同月18日にハバロフスク市住民集会に参加し、「労働ビューロー」設立を提案して、そのために100ルーブルを寄付したこと、また同月26日にウラジオストクでトリゴーニと会ったこと⁸が判明している。この間の事情をポーランドの作家で民族学者W. シェロシェフスキは次のように説明する。

「ピウスツキはサハリンからシベリアを経て帰国すべくウラジオストクへ行ったが、1905年の革命が彼を驚かせた。その町で彼は、最も著名な文化人の一人として現地知識人のいくつかの集会の議長をつとめ、さらに現地当局が行なおうとしていた無意味な殺戮を止めさせようとした。それと同じ精神から、彼は革命家たちに影響を及ぼそうとした。その結果彼は何ら目的を達せず、また殺戮を止められないまま、そこを逃げ出さざるをえなくなったのである。⁹」

かくしてピウスツキはヨーロッパ・ロシアへ帰ることを最終的に断念せざるをえなかった。彼は1905年12月中旬にN. P. マトヴェーエフ父娘とともに日本へ出発した。そして東京へ移動する途中であろうか、ピウスツキは神戸でトリゴーニ、「新鮮な空気を吸うために」ウラジオストクから3週間の予定で来日した後述のL. A. ヴォルケンシュテインと一緒にになった¹⁰。ピウスツキは『日本とロシア』の第15号（1906年1月15日）を東京の『東京日日新聞』編集部で入手している¹¹。最終第16号には革命家V. K. ヴァデーツキイとB. D. オルジフの写真とともに、

「プロニスラフ・ヨシフォヴィチ・ピルスツキイ、元サハリン政治流刑囚、サハリン・アイヌの習俗の研究者」というキャプション付きでピウスツキの写真が載った。これはペテルブルグの官憲の把握するところとなった¹²。

ピウスツキは12月下旬、遅くとも翌1906年1月上旬には上京して、当初は「セントラルホテル」や「松田」の家に仮住まいをした¹³。「セントラルホテル」は築地明石町32番館にある木造二階建てのホテルで、フランス女性ドットリングが経営していたが、この年の6月8日に全焼した¹⁴。東京外国語学校露語科教授の鈴木於菟平が1月6日付で同ホテル滞在のピウスツキに送った書簡が残っている。東京外国語学校は1873年に創立され、1885年に一度廃校となった後、1897年に復活した。鈴木は1881年に東京外国語学校露語科を卒業し、ロシア沿海州の実業界で働いた後、1899年から母校で教鞭を執っていた¹⁵。この書簡で鈴木は、ピウスツキをサポートする人間として、「前年に露語科を修了したシマダ氏」を推薦し、「彼はロシア語がとてもよくできる〔中略〕が、金に困っているので、多少とも長期間彼を使役するのであれば、いくばくかの報酬を支払ってやってください。¹⁶」と書いている。これは島田正靖のことだろう。島田は1905年1月に露語科本科を卒業し、陸軍通訳を命じられて11月まで勤務した。翌1906年5月から1907年4月まで再度陸軍通訳を命じられた後、外務省の翻訳生、外務属、外務通訳生、外務書記生としてロシア各地に在勤した¹⁷。鈴木がピウスツキに島田を推薦した時点では、島田は無職だったのである。この推薦が実を結んだかどうかは不明である。「松田」は松田衛^{まゐる}のことか。松田は1903年に外語露語科を卒業して三菱に入社したが、日露戦争の勃発で志願して奏任通訳となった。1919年に母校の教官となり、1933年に『松田和露大辞典』（東

京堂）を出すことになる¹⁸。もう一人、ピウスツキと交わりを持った露語科関係者として、大井包高^{かねたか}を挙げることができる。大井は東京外国語学校在学中に姫路のロシア人俘虜収容所の通訳をつとめた。1906年6月に同校を卒業し、後にペトログラード大学で法律学を学んだ後、日露貿易に携わり、ロシア通のジャーナリストとなった¹⁹。

1906年1月中旬にピウスツキは東京京橋区尾張町2丁目9番地²⁰の「箱館屋」という商店の2階に居を据えた。「箱館屋」の主人は、信大蔵^{しんたいざう}という人物。もと尾張藩江戸詰の武士で、榎本武揚に従って五稜郭の戦いに参加し、銃弾を6発受けたという前歴を持つ。その後プロテスタント信者となり、1874年に銀座に来て、榎本の援助のもとに函館の天然水や牛乳を商い、後にはアイスクリームや洋酒類も置いて、スタンドバーの元祖として銀座の名物のひとつとなった。ある資料によれば、「箱館屋」の主人は函館出身の漁師だったが、ウラジオストク沖合で嵐に遭い、ロシアの軍艦に助けられて、艦内で5、6年暮し、軍艦とロシア語、カクテルの作り方の知識を身につけた。その後函館で通訳をつとめた後、榎本武揚によって江戸に呼び寄せられ、榎本に従って五稜郭の戦いに参加した。1872年に上京し、銀座に榎本の命名で「箱館屋」という洋酒屋を開いた。アイスクリームを売り始めたのは1879～1880年頃で、西園寺侯をはじめとする洋行帰りのハイカラ連中が集まった。1923年の関東大震災頃までこの店は存続したという²¹。与謝野鉄幹に、店を蜂の巣、客を蜂、洋酒の棚を密の倉にたとえた「箱館屋」という1907年の長詩がある²²。この店はウラジオストク方面のロシア人と取り引きがあり、旧幕臣や朝鮮の亡命政治家・金玉均などがたむろしていたという。「箱館屋」は1876年にフランス人「M. テレウィアルソレルベール」著、木村宗三訳『小

供らが読むべき理学の問答』という子供向け科学入門書を出版しているが、その経緯は不明である。ピウスツキを「箱館屋」に紹介したのは、おそらく後述の二葉亭四迷だろう。二葉亭の父も尾張藩江戸詰の武士だった²³。

一方ラッセルの方は俘虜工作の目的を半ば達成したものの、俘虜を武装させてシベリアへ送り込むことはできなかった。1月31日に彼は長崎へ赴いた²⁴。日露戦争と1905年の第一次ロシア革命の挫折の後、多くのロシア人革命家がサハリンやウラジオストクから日本に亡命して、長崎がその拠点となった。ラッセルはこの地の^{さが}下り松南山手12番地に居を構えて、同志を糾合した。彼は当時わが国でよく知られており、例えば2月11日に『報知新聞』、また同日と翌日の『読売新聞』にも紹介記事が載っている。3月にラッセルは家庭の事情でハワイへ帰った。

2 新聞『ヴォーリャ』

4月27日に長崎でヴァデーツキイとオルジフが中心となって露字新聞『ヴォーリャ（自由）』を発刊した。この新聞は沿海州やシベリアの各地に広がって、争って読まれたという。ピウスツキは東京でこの新聞の協力者をつとめた。彼は4月26日付のM. A. ソロヴィヨフ（ウラジオストクの「アムール地方研究協会」運営委員会副委員長）宛の書簡にこう書いている。

「長崎に行く者を介していつもすべてを送り、例えばオルジフかズヴェーレワ女史か、あるいはかの地にいる他の人物に渡してもらって結構です。²⁵」

日本人の『ヴォーリャ』支援者としては、いずれも日本ハリストス正教会のニコライ神学校出身である上田将、軍司義男、高井^{まきお}万亀尾を挙

げることができる²⁶。当時の日本でロシア語学習の拠点は、東京外国語学校露語科と1874年創立のニコライ神学校だった。上田については後述する。軍司は1897年6月に神学校を卒業し、副伝教者としてニコライ主教に期待されたが、胸を病んでいた。1900年5月には伝教者を辞める旨を申し出て、ニコライの怒りを買っている。1897年から1902年まで女子神学校の雑誌『裏錦』に「旧約烈女伝」などを連載。1902年頃には金沢商業学校と金沢の陸軍第九師団司令部でロシア語を教えていた²⁷。そして1906年には『ヴォーリャ』の準社員として、日本の社会主義者の機関紙『光』の記事を数回ロシア語に訳して掲載した。恐らく日露戦争中は金沢のロシア人俘虜収容所の通訳をしていたのだろう。その時にラッセルと知り合い、彼の考えに共鳴して協力するに至ったのではないか。軍司の7月12日付のピウスツキ宛書簡に、「最近し終えた翻訳をお送りします。お急ぎでなければ、さらに第二の翻訳に取り掛かることができます。²⁸」とある。一方ピウスツキの1909年の論文「サハリン島の原住民」（ロシア語版とドイツ語版あり）に岡本柳之助の『日魯交渉北海道史稿』からの引用があり、「知人の日本人が私のために訳してくれた。」とピウスツキは書いている²⁹。これは軍司の翻訳を意味しているのかもしれない。第二次世界大戦前に亡くなる直前まで、軍司は長く南満州鉄道のハルビン事務所に勤務した³⁰。

ピウスツキの1906年6月17日付の二葉亭宛書簡に、「数日間出発を延ばさねばならないでしょう。ウラジオストクの友人たちからニュースを持ってきてくれるはずのたかいさんが近く帰るとの知らせを受け取りましたので。³¹」とあるが、この「たかいさん」とはアントニイ高井万亀尾のことだろう。高井は神学校を卒業後、伝教者として働き、1902年9月から神学校で教鞭を執った。1905年4月に輔祭に叙聖され、熊

本のロシア兵俘虜収容所に派遣された。その後高井は長崎のロシア人に請われて司祭として長崎教会に赴任し、以後約40年間かの地を中心に正教の伝道に当たった³²。従って、上記ピウスツキ書簡が書かれた時点で、高井は長崎におり、現地のロシア人と交流があったのである。ニコライ主教は長崎での高井の活動についてこう書いている。

「アントニイ高井〔万亀尾〕神父が受難週の様子、長崎のロシア人、日本人信徒の復活大祭の祝いの模様を知らせてきた。〔中略〕長崎には、日本人だが敬虔な奉仕と穏やかな性格のゆえにみなから称賛され、慕われる司祭がいることは、ロシア人信徒には幸せなことようだ。³³」(1908年5月3日(16日)の日記)

7月初旬にピウスツキは長崎へ移り、一カ月間稲佐の志賀親朋方に居を定めた。志賀は、本邦最初のプロのロシア語通辞として幕末、明治期の日露交渉に活躍した人物である³⁴。ピウスツキはかの地で直接ロシア人・ポーランド人革命家たちの活動を支援した。E. プロスキをはじめとするサハリンとウラジオストク時代の知り合いがいたのである。プロスキはポーランド人革命家で、「プロレタリアート」党創設者の一人。彼らに会って、その後自分がアメリカでいかなる点で彼らの役に立ちうるかを探ることが、長崎訪問の目的だった。またピウスツキは長崎でV. アレクセーエフスキイから東京方面での教職探しの依頼を受け、それに応えて東京、横浜の知人や学校に問い合わせの手紙を送った。アレクセーエフスキイは社会革命党員で、ブラゴヴェシチェンスクから長崎に亡命してきた。後に1918年、ブラゴヴェシチェンスクでアムール州長として日本軍の特務機関員・石光真清と出

会うことになる³⁵。後述の社会主義者・加藤時次郎の7月11日付のピウスツキ宛ドイツ語書簡が残っている。それによると、長崎のあるロシア人が東京で日本の学生に教える仕事で生活していけるかどうか、ピウスツキが加藤に問い合わせたことが分かり、それに対して加藤は、もし最初の数カ月間教授料なしでも生活できるのであれば次第に学生が見つかるだろうと書き、当人が英語やドイツ語もできるかどうかを尋ねている³⁶。またピウスツキは横浜のセント・ジョセフ・インターナショナル・カレッジから、さしあたりロシア語教員の募集はないこと、横浜のロシア総領事 V. F. グロッセからも別人物の推薦があったことを伝える、7月15日付のフランス語書簡を受け取っている³⁷。さらに第6章で言及する女性社会運動家・遠藤清の7月17日付のピウスツキ宛英文書簡が残っており、彼の友人が東京に来て私立のロシア語学校をつくるのであれば協力すると伝えている³⁸。アレクセーエフスキイは翌年初めにウラジオストクへ渡っているので、東京方面での求職運動は不首尾に終わったものと思われる。ピウスツキは長崎のロシア人たちのために自分のパスポートを『ヴォーリャ』社に置いていったが、これは後々彼がヨーロッパで苦労する原因となる³⁹。

『ヴォーリャ』は翌1907年3月5日発行の第98/99号まで続いたが、グループ内部には不協和音が響いていた。当初編集長をつとめていたヴァデーツキイは他の亡命者たちと不和になり、アメリカへ去った⁴⁰。1906年11月21日付の書簡でピウスツキは長崎の同志宛にこう書いている。

「ニューヨークでヴァデーツキイと会いました。〔中略〕あなたがたのコロニーと手紙のやり取りをして、彼は起こってしまったいさかいのすべてに誠実にけりを付けると私に約束しました。彼がそれを実行するかどうか、

興味あるところです。⁴¹」

『ヴォーリャ』は1906年5月17日発行の第11号からオルジフが編集長となった⁴²。ユダヤ人のオルジフ(1864-1934以降)は1886年に「人民の意志」党を再建しようとして逮捕、シュリッセルブルグ要塞監獄に入れられた。1898年にウラジオストクに流刑となり、かの地でピウスツキと親交を結んだ。オルジフは1905年10月のウラジオストク反乱に加わった。

ピウスツキは情勢の「好転はありえない⁴³」とS. A. ガルフィリドに書き送っていることからして、革命運動に対して少なからず懐疑的になっていたふしがある。ガルフィリドはウラジオストクの評論家兼詩人で、1906年6月に横浜に来て「クラブホテル」に滞在していた。ガルフィリド夫妻はピウスツキとほぼ同時期に日本を去ってウラジオストクに戻り、8月に立憲民主党系の新聞『ウスリー生活』を創刊した。翌年1月にはペテルブルグへ去った⁴⁴。

ピウスツキはラッセルに4月10日と6月13日に手紙を書いたのに対し、ラッセルの方は『フィリピン委員会報告書』2巻を郵送してきた⁴⁵。ラッセルはハワイ滞在中から『ヴォーリャ』に批判的で、6月24日付の書簡で次のような手厳しい意見をピウスツキに伝えている。

「長崎の我々の仲間の劣悪な財政状態に関して言えば、彼らに大いに責任があります。株式会社をつくり、日刊新聞を出し始めたものの、それは国外では意味を持たない、等の点です。[中略]ヴァデーツキイの出立により、『ヴォーリャ』は良くなりましたが、この週3回[発行]という形式では、決して金を稼ぐことはできないでしょう。⁴⁶」

一方ピウスツキは7月30日、日本を離れる直

前にラッセルに書簡を書いた。ピウスツキはこの書簡で、革命運動にとってシベリアが重要な位置を占めていること、それゆえ長崎に確固たるサークルが必要なこと、自分の出国とともに日本国の代表者たちとのつながりの最後の糸が切れてしまうこと、長崎でロシア人亡命者の間に軋轢が生じていること、そしてこれらの問題を解決できるのはラッセルしかいないことを伝えている。オルジフと『ヴォーリャ』の置かれた状況についてはこう書いている。

「現在、例えばオルジフは忍耐力がなく、過度に権威主義的になる欠点があります。[中略]社会民主労働党員は『ヴォーリャ』に敵対しているし、他の者は批判するための多くの材料を見つけ、協力しようとしません。[中略]オルジフはユダヤ人で、ウラジオストクでの活動で社会活動家にとっては不可欠の尊敬の念を獲得できなかったことも、意味ももっています。⁴⁷」

ピウスツキは自己の革命運動に対する関わり方を後にこう述べている。

「小さな意見の不一致のために、もっとも大切な共通のものとの共通の主要な敵を見落とさないように、私個人は常にすべての進歩的な党を集約することに賛同してきました⁴⁸。」

ピウスツキの書簡をハワイで受け取ったラッセルは、8月23日に彼に返事を書き、その意見に従ってヨーロッパに戻ることを断念し、長崎に戻る旨を伝えている。ラッセルが長崎に到着するのは9月中旬のことである⁴⁹。ラッセルの留守中に実権を握ったオルジフは、彼を疎外しようとした。ラッセルが長崎に戻ったことも、彼とオルジフの対立もまだ知らないピウスツキ

は、10月にニューヨーク出発前に長崎の同志宛にこう書いている。

「私個人は『ヴォーリャ』のことをひどく愚痴りました。『ヴォーリャ』からは、私の出発以後シベリアについては何ひとつ知ることができなかつたのです。[中略] 遠くからますますはっきりと私の目に飛び込んできたのは、『ヴォーリャ』のあらゆる欠点と、それがシベリアの生きた仕事と生活とのつながりを欠いていることです。『ヴォーリャ』は主としてそれを使命としていますのに。[中略] ニコライ・コンスタンチーノヴィチ [ラッセル] からだけは手紙を受け取りましたが、それはまだハワイから長崎へ出発する直前に書いたものです。⁵⁰⁾

ラッセルが長崎に戻ったことをピウスツキが知るのは、ウラジオストクのジャーナリストで「人民の意志」党員 L. P. ポドパーフが10月14日に東京から発送した書簡をガリツィアの首都クラクフで受け取った時である⁵¹⁾。一方、ラッセルは11月16日にピウスツキに書簡を書いた。

「私のすべての要求を支持する『ヴォーリャ』批判に対してもお礼を申し上げます。私の要求はきわめて敵対的に迎えられたので、しばらくの間脇に離れて、編集者と委員会議長から自発的に私的な顧問に変わらざるをえませんでした。⁵²⁾

オルジフや B. オヌフロヴィチー派とラッセルの闘争は、前者が勝利を占めたようだ。1907年10月17日付のラッセルのピウスツキ宛書簡によれば、オルジフの仲間の中傷により、中央委員会がラッセルらの東洋在外委員会のスタッフを「偽物」と見なし、党から切り離したので

ある。ラッセルは『ヴォーリャ』と袂を分かち、約30人から成る別の組織「人民解放救援同盟」をつくった。これはロシア人亡命者の救援活動を目的としたものと思われ、そのためにラッセルは「ヴォーリャ」出版所とは別個に、資本金10,000ルーブルの「極東」印刷所を設立した。だが「人民解放救援同盟」は長続きせず、1907年8月に解散した⁵³⁾。出版物から判断すれば、「ヴォーリャ」出版所の方が「極東」社よりはるかに充実していたことは事実である。

3 中国人革命家

ピウスツキは在日中国人革命家とも交わりを持った。1906年3月10日の午後から夜の12時まで、彼は芝区芝橋の「大光」で宋教仁と会見した。湖南出身の宋は1904年来日し、東京で雑誌『二十世紀之支那』を発行していたが、翌1905年8月に東京で孫文を総理として「中国同盟会」が結成されると、その幹事として会務を担当した。当時24歳の早稲田大学の学生である。「中国同盟会」は11月に月刊機関誌『民報』を発刊した。日本の文部省はこのような動きに対して、11月2日に「清国留学生取締規則」を公布した。それに対し留学生たちは12月4日に抗議のストを行なった。この頃の中国人留学生数は約1万人である。ピウスツキと宋の会見の仲介の労をとったのは宮崎民蔵。中国革命支援で名高い宮崎兄弟の次男で、土地問題の先駆者である。宋の当日の日記には次のように記されている。

「しばらく待っていると、ロシアのビルスドスキーがきた。四十くらいの渦巻きひげをはやした人であった。フランス語を喋るので余らはみんなわからなかったが、宮崎がまえてつれてきていた某君が通訳に当たった。[中略]「ロシアの革命党派は多く主張も一つ

ではなく、人民の程度も一様ではない。革命の成功は何時期待できるかわからない。」といひ、また、「自分はポーランド人で今回はシベリヤの〇〇〇〇〔4字、カラフト?〕からきた。さらに数人の同志がおり、当地で出版して祖国に運び込もうと思っている」と語った。また「革命の事業は一方面から着手すべきではなく、政治革命ばかり説いても、必ずしも真の自由を得ることはできないし、社会革命ばかり説いても、必ずしも真の自由を得ることはできない。必ず二つを同時に行ない、そうした後、自由の権利を得ることができ、目的を達成できるのである」、といった。また「自分はこれまで懸命に民主主義を主張してきたが、しかしアメリカを見ると、民主国であるが人民はなお自由ではない。フランスも民主国であるが、しかしその人民もやはり自由ではない。日本、イギリス、ドイツなどの諸国でも人民は政治上の自由は多少得ていないとはいえないが、しかし社会上の不自由さはますますひどくなっている。だから自分の最近の主張は、以前に較べるとやや変ってきており、じつは政治社会方面を併行して改良したいと考えている、云云」といった。⁵⁴

3月25日夕刻にもピウスツキは中国人留学生らと飲食店で食事をした⁵⁵。ピウスツキは宋に当時計画中の『ヴォーリヤ』のことも話した。ピウスツキはこの後『民報』社を訪れ、宋教仁、黄興、その他多くの中国人及び宮崎民蔵、宮崎兄弟の末弟・滔天とうてん（本名・寅蔵）、その他の日本人とともに記念撮影を行なった。ちなみに滔天らは9月から翌1907年3月まで雑誌『革命評論』を発行したが、これはロシアの革命運動と中国の革命運動との連携を目的の一つに掲げていた⁵⁶。後にクラクフでピウスツキはこの雑誌のある号を受け取っている⁵⁷。ピウスツキは孫

文とも会っている。ピウスツキはアメリカでロシア通のジャーナリスト、ジョージ・ケナン宛に書いた英文書簡の下書きと思しきもので、自分と孫文とラッセルを既知の間柄にあるものとして語っている⁵⁸。ピウスツキは4月10日付のハワイのラッセル宛の書簡にこう書いている。

『民報』という名前で日本国内で出ている革命機関誌のメンバーの、ある中国人学生の手紙を同封します。彼らは皆ロシア国内の革命運動に大いに共鳴しており、いずれ役に立つかもしれません⁵⁹。」

ピウスツキは中国人とさらに交渉を深めたのであろう。『民報』第4号（4月28日）に『ヴォーリヤ』刊行の紹介文が掲載されたが、その材料を伝えたのはピウスツキである⁶⁰。彼は6月13日付の書簡でラッセルに『民報』社の住所を伝えている⁶¹。一方ラッセルは同月24日付のピウスツキ宛の書簡にこう書いている。

「中国人革命家たちの手紙を有難うございます。私は彼らに手紙を書き、何やかや送ったのですが、また宛先がなかったのも、東京の『中国語新聞』社としか書けませんでした。⁶²」

結局ラッセルの書簡は中国人たちのもとに届いた⁶³。いま一人、呉弱男ともピウスツキは会っている。呉は上海に生まれ、愛国女学校で革命家としての教育を受けた。ほどなくして姉・呉亜男とともに来日し、青山女学院英文科に入学した。「中国同盟会」にも入会、当時18歳である。彼女はピウスツキと4月3日に会い、翌日自分と姉の写真と、自著『20世紀自由の鐘』（“The Twentieth Century Liberty Bell”, 1905）を彼に送ってきた⁶⁴。呉をピウスツキに引き合わせたのは、後述の社会主義者・横田兵馬である。

横田は3月30日付のピウスツキ宛フランス語の葉書にこう書いている。

「まだ18歳で、革命派の中国人のお嬢さんがいるのですが、会っていただけでしょうか。彼女が是非何としてもお目にかかりたいと言っているのです。彼女は今ある学校で学んでおり、夜は外出できません。お宅へ伺えるのが日中に限られるため、ご迷惑にならない日時をご指定いただきたく存じます。⁶⁵」

7月5日の『ヴォーリャ』第32号に「中国女性革命家」と題して呉の編集長宛の手紙（英語からのロシア語訳）が掲載されたが、あるいはこれもピウスツキの仲介によるものか。彼女はこう書いている。

「あなたがたの革命は民族的な事業であるばかりではなく、国際的なものです。われわれは自らの工作を各々の祖国ではじめねばなりません。しかし、われわれの思想は全地球へひろがらしめましょう。正義は将来必ずや勝利いたします。⁶⁶」

ピウスツキはポーランド人として、民族独立の課題を持つこれら中国人に関心を寄せるどころ大だったのだろう。後に1907年10月5日付の書簡で、ピウスツキは二葉亭にこう書いている。

「朝鮮に関していえば、我々日本の真の友人は、日本が大規模な帝国主義と弱者の独立を抑圧する途へ踏みだしたことを、極めて残念に思っています。⁶⁷」

4 二葉亭四迷と横山源之助

1906年初頭、ピウスツキは二葉亭四迷、本

名・長谷川辰之助（1864-1909）のもとを訪ねた。二葉亭は1904年3月より大阪朝日新聞社東京出張員となっていた。彼は文学の世界に踏み込んでからも、対露政策に関心を持ち続け、ロシア革命派への関心を強めつつあった折りにピウスツキに出会ったわけで、ピウスツキに物心両面で惜しみなく援助を与え、さまざまな人々に引き合わせた。二葉亭の真意は、「日本のために満州経営を必要とし、露国の為には社会主義者一派に援助して、民権の伸ぶるを必要としたものだらう。⁶⁸」という。二人はほとんど毎日行き来し、短時日のうちに極めて親密な間柄となった。二葉亭はピウスツキについて次のように述べている。

「▲現に自分の知つて居る露人中に斯様の人物が一人居る。西比利亜で苦役に服し、今は四十才位であらうか、未だ家をなさない。而もアイヌ救済を一生の大責任と心得て、東京まで出て来た。所が世間が餘りに冷淡なので大に憤慨して居たやうだ。▲さらば御當人はと言へば、囊中屢ば空しと言ふ有様で、衣服などは粗末で、食物などは何をも選ばぬ、生命さえ継げば、夫れで充分だ、ドウしてもアイヌの如き憐むべき人種を保護しなければならぬと考へて居る。▲局外から見れば、実に馬鹿げて居るやうだが、其のあどけない真面目の態度が、吾々の同情を惹く所である。⁶⁹」

まもなくピウスツキは二葉亭を見込んで、革命党の資金作りのために、ラッセルがハワイに持つ100エーカーの邸宅農園の売却に協力してほしいと頼んだ。1月24日に二葉亭は神戸のラッセルに初めて書簡を書き、ロシア革命派の新聞『イスクラ』、『新生活』、『革命ロシア』を入手する方法を問い合わせている⁷⁰。これは、ピ

ウスツキが二葉亭にこの相談を持ちかけた頃のことと思われる。後にピウスツキはクラブからラッセルに宛てた書簡(1907年1月下旬)で、「あなたは長谷川と知り合いになりましたか。⁷¹」と尋ねている。つまり、ラッセルがハワイに帰る前には、二葉亭は彼と会う機会はなかったのである。ラッセルが長崎に戻った後、二人が顔を合わせたかどうかは不明である。

二葉亭は張り切ってピウスツキと共に『毎日新聞』の社主・島田三郎、大隈重信、女子教育で名高い巖本善治を訪ね、また『自由党史』の編集者・和田三郎の紹介で板垣退助を訪ねた。この要人訪問はいずれも不成功に終わったかに見えたが、しかしそれがラッセルの土地売却のためというは名目上のことで、実は日本政府が亡命ロシア革命家をロシア政府に引き渡すつもりかどうかを打診するためのものだったのである。この年の春にロシアは日本に対して、政治犯を含む犯罪者引き渡し協定の締結を申し入れていた⁷²。後に島田三郎は次のように述懐している。

「其後〔長谷川君は〕亡命の露国人某を同伴せられて其の安全を保つべき方法を相談せられたれば愚見を述べ、且大隈伯其他一二の人々に紹介したり。⁷³」

この一事が『ヴォーリャ』の人々の心配の種だった。後述の横山源之助の回想によれば、「特に大隈伯の如きは、例の長広舌を以て「西比利亜の広野に共和国を創立すべし」など放語したので、ピ氏は大喜び!⁷⁴」したという。

さて打診の結果はどうだったか。ピウスツキは3月3-4日付の書簡でラッセルにこう書いている。

「当地では何も変わっていません。私が言

葉を交わすことになったすべての人が請け合うところによれば、引き渡しのことは何ひとつ恐れることはなく、そうなるのはさほど簡単ではなく、さほどすぐのことでもありません。⁷⁵」

また4月10日付のラッセル宛書簡にもピウスツキはこう書いている。

「私は大隈とさらに何人かの人物を訪問しましたが、現在のところ皆が亡命者に対して好意的です。⁷⁶」

5月7日発行の『ヴォーリャ』第6号にはV. ゴルヴィツの論文「政治亡命者引き渡し」に付して、次のような編集部の発表が掲載された。

「東京その他の日本の地域にいる編集部員が、日本の文化界の代表的人物、若干の議員や政治家と行なった多くの話し合いから、日本が政治犯の引き渡しを許さないばかりか、ロシア政府の意を汲んで政治犯を圧迫することもしないという点について、まったく疑いはないことが明らかとなった。⁷⁷」

日本の支配層のロシアに対する警戒心はなお強烈で、露国革命党は依然として同盟者たる資格を失っていなかった。他方社会主義に対しては、時の西園寺内閣は一定の柔軟路線をとり、この年2月に日本社会党の結党を認めている。このような政策のもとで、『ヴォーリャ』グループはわが国で存在していたのである。

ピウスツキは4月5日付の書簡で二葉亭にこう伝えている。

「ブラゴヴェシチェンスクから数名逃亡してきました。チタからも幾人か到着しました。

オルジフもうまく検挙を逃れました。それで、今や長崎でかなりのグループが組織できます。—こちらへ移住するよう誰に勧めたものか、どのように生計をたてたものか、この問題に決着をつけるためあなたと相談したかったのです。[中略]四、五日後に、オルジフおよび、こちらへ来るとの電報をくれたその同志に会います。⁷⁸」

またその5日後にピウスツキはラッセルに宛ててこう書いている。

「オルジフがうまく逮捕を逃れて、今長崎におり、近日中に東京に来ることを、あなたは恐らくもうご存知でしょう。⁷⁹」

オルジフはこの頃来日し、東京で二葉亭とも会っている。

まもなく二葉亭は革命派の運動に冷淡になっていった。同年(月日不明)、北京警務学堂時代の同僚・阿部精二に宛てて、彼は次のように憤懣をぶちまけている。

「西伯利より露国革命派続々逃込み、中には東京へ来るものも有之候故、此等を相手に一と仕事と出懸けし處、相手か丸でお坊ちやんにて話にならず、到頭骨折損となりたり、今も革命派の上京する者は必ず来つてあれこれと相談を掛け候へども最早相手にならない事に決し候、渠等は皆空論を以て事を成さんと欲する徒にて口舌以上の活動をせんといふ意なし、こんな事で何が出来るものかと愛想をつかしたる次第に候⁸⁰」。

この点について横山はこう書いている。

「用心深い君[長谷川君]の眼にはかれ等

が余りに理想的で、実際運動の拙劣に失望したのであらう。後日君は露国革命派の主義に忠実なのを認めてみたが、露国の人物は、武断派に在りといつてみたのを見ると、渠等の人物が余りに単純で、実際的手腕の欠けてゐるのに愛想が盡きたものと見える。⁸¹」

第2章で触れた革命家たちの内紛も二葉亭の憤懣の一因だろう。ピウスツキは二葉亭の心境の変化を察知していた。彼はラッセル宛書簡(6月13日付)にこう書いている。

「ロシア語の翻訳者のうち私が信頼できるのは長谷川だけです。しかし彼は東京でのオルジフとの会談の後、あるいは別な理由でか、亡命者サークル全体に対してひどく冷淡になりました。あなたはすぐに[長崎へ]来ないのか、と彼は始終尋ねています。⁸²」

だが、ピウスツキとの交際は変わりなく続いた。二葉亭は彼の「年を取った小児」のような人柄を愛したのである。帰国が決まった時、「イの一番に尋ねたのは、長谷川君の家で、二十幾貫の大男が飛びついて、^{ほろ}潜々と涙を出して、君に喜悦を分つたといふ⁸³」。6月19日にピウスツキと二葉亭は東京・本郷の中黒写真館で記念写真を撮った⁸⁴。

ピウスツキに文学の素養があったことも、両者の交遊を途切れさせなかった一因だろう。ウラジオストクでN. P. マトヴェーエフが発刊した雑誌『極東の自然と人々』にピウスツキは「日本より」という記事を連載したが、同誌第20号(旧暦6月11日)所載の記事にはこうある。

「マクシム・ゴーリキイは日本の読書界でとても有名である。多くの者はゴーリキイを英語訳で読んでいるが、いくつかの短編は日

本語訳もある。ゴーリキイのみならず、概してロシア作家たちの最良の翻訳者としては、ロシア文学とロシア語通の長谷川氏を挙げなければならない。⁸⁵」

後にピウスツキはゴーリキイと文通し、ある書簡で二葉亭のことを伝えている⁸⁶。1906年7月に二葉亭はピウスツキから、クプリーンの『決闘』を収めた『ズナーニエ社文集』を入手している⁸⁷。

二葉亭がピウスツキを引き合わせた人物のひとりに横山源之助(1870-1915)がいる。二葉亭の影響下に放浪生活に入った横山は、同じ関心を持つ松原岩五郎や嵯峨の屋お室と交わって社会問題に興味をもち、『毎日新聞』に入社。以後ジャーナリストとしての生活を続けた。そして1899年に2冊の名著、『日本の下層社会』と『内地雑居後之日本』を出版した。横山は、明治維新の性質、財閥富豪の生成と経済外的特質、日本の産業革命が社会に及ぼした影響、貧民、労働階級の発生と状態を究明し、大衆に知らせようとした。

1906年早春のある雨の日の夕方、二葉亭とピウスツキが湯島天神の横山の下宿にやって来た。三人はお成道の西洋料理店で夕食を済ませた後、横山の下宿に引き返して語り始めた。ピウスツキは横山に、「日本の学者は何故日本の舊民族である此のアイヌを閑却してゐるのであらう」と言った。「学者的態度を以て研究するばかりでなく、正義博愛の観念強く、社会的同情を以てアイヌの現状を見てゐたのが日本の学者と異なる所⁸⁸」だった、と横山は書き残している。二葉亭がピウスツキを紹介したのは、ピウスツキのアイヌ研究と横山の下層社会研究に相通ずるものがあると考えたためだろう。次のような横山の証言も、彼がピウスツキと身近に接した人

間であることを示している。

「で、ピ氏自身は革命運動に怖気を立て、革命は好物だが、運動が嫌ひだといつてゐたが、永年西比利亞に漂ひ、革命者に知己が多かつた所から、此の無邪気の人も、日本に在留してゐた露国革命党の捲き添となり、日本に在留して長崎と東京との連絡と為つて、革命党の為に民間に運動してゐた。⁸⁹」

横山が被差別部落民のことを話すと、ピウスツキは強い関心を示し、すぐに自分で訪ねていった。被圧迫民族のポーランド人である彼が、この日本でアイヌ人と被差別部落民に関心を寄せたことは記憶されてよい。ラッセルの土地売却の件で二葉亭とピウスツキを島田三郎に紹介したのは、以前『毎日新聞』に勤めていた横山である。但し、二葉亭は横山に要人訪問の真の目的を明かしてはいない⁹⁰。

横山はピウスツキからの聞き書きで、二つの文章を著した。一つは「露国革命婦人」と題するもので、松原岩五郎編集の雑誌『女学世界』の1906年4月号に発表された⁹¹。女優ナロードニキ、リュドミーラ・ヴォルケンシュテインの一代記である。ヴォルケンシュテインはハリコフ県知事クロポトキンの暗殺に加わったかどで逮捕され、ペテルブルグのシュリッセルブルグ要塞監獄に禁固、次いでサハリンへ徒刑となった。1902年に刑期を終えてウラジオストクに移住。そして1906年1月23日、かの地に起こった争乱でヴォルケンシュテインは殺戮されたのである。ピウスツキは彼女とサハリンで同囚だったので、その死を深く感じて横山に話したのだろう。ピウスツキは横山のために、ヴォルケンシュテインの伝記をラッセルに依頼した。

「また鉛版を予約するために、リュドミー

ラ・アレクサンドロヴナの伝記と写真をお願いします。⁹²」

「露国革命婦人」は明らかにこの伝記に依拠している。ラッセルは写真は送らなかつたようで、写真は掲載されていない。4月5日付の二葉亭宛書簡でピウスツキが次のように書いたのは、この論文のことである。

「すでに博文館の雑誌に横山さんの文章が掲載されています。彼が鉛版をくれるのを待っています。中国の学生たちに頼まれましたので—。⁹³」

いま一つの文章は「来遊中の布哇砂糖王（露国革命党の金主）」と題するラッセルの一代記で、雑誌『商業界』の同年4、5月号に分載された⁹⁴。横山は俘虜工作の終わりまでのラッセルの経歴をかなり正確に物語っているが、その前書きと後書きから、ピウスツキがラッセル自身から聞いた談話を横山に伝えたこと、その際二葉亭が両者の通訳をつとめたことが分かる。本論文は、当時の日本の読者に露国革命派のタイプを提示している。

ピウスツキは11月21日付と翌1907年11月21日付の二葉亭宛書簡で、近く出る予定の横山の本のために序文執筆を頼まれたが断わったことを気にかけて、それは謙遜ゆえだったと繰り返している⁹⁵。これは1906年10月に出た『海外活動之日本人』（松華堂）のことだろう。

5 日本・ポーランド協会

ピウスツキと二葉亭は日本・ポーランド協会を設立し、両国の交流をすすめるために、「先づ一番容易で、一番故障の少ない文学」の翻訳、紹介を取り上げることにした。そして編集者・

西本波太の出版所が協会の事務所となった。ピウスツキの帰国後も、両者の関係はとだえなかつた。現在早稲田大学中央図書館に、ピウスツキが日本国内およびヨーロッパから二葉亭に書き送った書簡計15通が保管されている⁹⁶。これらの書簡から、ピウスツキがクラブでシェロシェフスキ、ワシレフスキ⁹⁷、シマンスキといったポーランドの代表的作家、批評家に自作の推薦やその露・独・仏・英訳の寄贈を求め、それらを二葉亭に送ってきたことが分かる。東京に日ボ協会付属図書館を設けるためである。そしてこれらの作品の日本への紹介を、ピウスツキは二葉亭に繰り返し依頼した。

そのうち二葉亭によって訳出されたのは、アンジェイ・ネモエフスキの散文詩『愛』（1896年）と自然主義作家ボレスワフ・ブルスの『棕のミハイロ』（1880年）である。『愛』は革命家の心境をシンボリックに歌ったものである。『棕のミハイロ』は二葉亭の翻訳中、乞食や無宿人のような社会の最下層の人間を扱った作品群に属する。後者はマリア・ジャルノフスカ送付のロシア語訳からの重訳である。ピウスツキはガリツィアに戻った後、幼馴染みの人妻マリアと一時期一緒に暮らした。これらの翻訳は、革命家P.S. ポリワノフの短編小説の二葉亭訳『志士の末期』とともに、福田英子の雑誌『世界婦人』に発表された⁹⁸。1906年2月に二葉亭を福田に紹介したのはピウスツキである。そして同誌はあたかも日ボ協会の機関誌のような役割を果たすようになった。『世界婦人』の発行を援助したのは、社会主義者・石川三四郎である。後に福田は、「並々の雑誌社書肆等が如何に請ふとも仲々に筆とり給はぬ氏が斯く引続き筆とり賜りしは全く孱弱なる吾が苦境を憐れみ給ひしが故なりき。⁹⁹」と心配りを見せているが、内実はむしろその逆とすべきである。即ち、『志士の末期』は後半が抄訳、『愛』は未定稿、『棕

のミハイロ』は未完であって、ここには当時の二葉亭の創作と翻訳における苦渋の他に、ある種のわがままをも認めることができ、『世界婦人』に対する彼の関わり方に一種の気軽さのようなものがあったことは否めない¹⁰⁰。

一方二葉亭も1907年、ピウスツキに森鷗外の『舞姫』と木下尚江の長編小説『良人の自白』のそれぞれ英語版¹⁰¹を送った。だが、前者は日本文学の特徴が表われていないという理由で取り上げられず、後者のみがポーランド語に翻訳された¹⁰²。二葉亭と木下の出会いは1906年2月初旬のこと。二葉亭がピウスツキを伴って、木下の勤務する毎日新聞社を訪問したのである。

「長谷川君の背後に一人の外人が立つて居る。長谷川君は顧みて、其の人を紹介した。波蘭の革命党員で、シベリヤの流罪地から逃れて居たのだ。始めて見た時には一寸老人かと思つたが、話して居る中に壮年者であることが知れた。¹⁰³」

その後も二葉亭と木下はいつも「箱館屋」の二階で会ったという。後に二葉亭は自ら『舞姫』をロシア語に訳し、ポドパーフが横浜で発刊した露文雑誌『東洋』^{ヴォストーク}の第1、2号（1908年1、2月）に掲載した。『東洋』は日本文学の紹介と商工業関係の報道をうたっていた。ピウスツキは二葉亭の小説『其面影』と『平凡』をポーランド語とロシア語に訳して、ガリツィアとロシアで発表することを考えていたが、二葉亭は結局それには応えなかった¹⁰⁴。

宿願かかって二葉亭が、ナロードニキの色彩の濃いペテルブルグの月刊誌『ロシアの富』に寄稿することになるのも、ピウスツキとマリアの斡旋による¹⁰⁵。ペテルブルグのロシア文学研究所手稿部の『ロシアの富』のフォンドに、シェロシェフスキの同誌編集長 N. F. アンネンス

キイ宛の書簡（旧暦1907年10月14日付）が保管されている。当時作家として広く名を知られていたシェロシェフスキはこの書簡に、ロシアのなんらかの雑誌への寄稿を求める二葉亭の書簡を同封し、『ロシアの富』への寄稿者として以下のように二葉亭を推薦して、彼の東京の住所を伝えている。

「日本の小説家・長谷川辰之助が、私が一緒にアイヌ調査旅行を行なった私の知人 Br. ピウスツキに連絡をよこして、ロシアの何らかの雑誌に寄稿先を見つけてほしいと言ってきました。『ロシアの富』が彼にとってもっともふさわしい雑誌だと私は思います。彼はしばらくの間東京高等学校のロシア文学の教師をしていました。その後は彼は独創的な小説家のみならず、ツルゲーネフ、L. N. トルストイ、ガルシン、ゴーリキイ、アンドレーエフを日本語に翻訳した唯一の人物として有名です。現代日本に関する彼の論文は、ロシア人のみならずヨーロッパ人全般にとっても、多大の関心を引き起こしうると私は思います。¹⁰⁶」

恐らくピウスツキからの依頼で、シェロシェフスキは二葉亭の事業を側面から援助しようとしたのだろう。アンネンスキイが二葉亭に寄稿依頼の手紙を書いたのは、その18日後のことである¹⁰⁷。

もともと、当時経済的に苦境にあったピウスツキが、この仕事によって収入を得ようとしたことも事実で、二葉亭に、「正直いって私はこの仕事で幾らか稼ぎたい。…翻訳料として原稿料の一部を受け取りますが、よろしいか。¹⁰⁸」（1907年10月24日-11月6日付）と断わっている。これをうけて二葉亭はアンネンスキイに次のような手紙を書いた。

「もし私の原稿がそれに値するのであれば、原稿料は私にでなくピウスツキにお送りいただくようお願い致します。二人で分け合う積りでおりますので。¹⁰⁹」(同年 12 月 18 日付)

二葉亭の人柄を偲ばせる文面である。これに対するアンネンスキイの返信(旧暦 1908 年 1 月 21 日付)は、しかしながら、ピウスツキが読めば落胆するに違いないものだった。

「特に申しあげたいのは、あなたのことばの方がピウスツキのロシア語よりもはるかに正しいことです。[中略]第三者の手を経ないで直接こちらへ送って下さるほうが、あなたの文章に二、三の必要な修正を加えるのも簡単にすみます。¹¹⁰」

同時に二葉亭の著作のピウスツキによるポーランド語訳を、ポーランドの『スフィンクス』誌に寄稿することも決まった。1907 年 11 月 6-7 日付のマリア宛の書簡にピウスツキはこう書いている。

「文学者のブコヴィンスキが来たが、彼はワルシャワで「スフィンクス」という名の新しい雑誌を出そうとしている。僕の友人の長谷川の論文を載せてはどうかという提案に喜び、最初は同人として彼の宣伝まですることになるだろう。[中略]僕の日本の文学者の友人[長谷川のこと]からまたうれしい手紙を受け取った。自分の息子のことを夢中になって僕に書いている。その子は僕が日本にいる時に馬の月に生まれて、日本の習慣に従って、僕からプレゼントをもらったんだ。友人は僕にもそのような赤ちゃんが授かるように心から願うと言い、「親馬鹿」という日本の慣用句

を付け加えている¹¹¹。」

ピウスツキが言及している二葉亭の子供は、1906 年 1 月 26 日に誕生した三男・健三である。

だがピウスツキとアンネンスキイの督促にもかかわらず、二葉亭は結局いずれの雑誌にも原稿を送らなかったようだ¹¹²。ピウスツキは二葉亭の性格の不可解さに気づいていた。ピウスツキがクラブからラッセルに送った書簡(日付不明)にこうある。

「長谷川のことを何か聞いていますか。彼は執拗に沈黙を守っていますが、それがなぜなのか分かりません。彼は他の亡命者たちと関係を結んだのでしょうか。彼の振る舞いはいつも何か変でした。この上なく熱心に、心からすすんで人と知己を結ぼうとし、ありとあらゆる援助をしようとするかと思えば、まるで腹を立てたみたいに冷淡になり、すべてのことから手を引いて、ただ小説を書くことだけに専念したいと言ったりしました。社会生活が彼を引き寄せ、そして怯えさせたのです。でも彼は仕事のできる、しっかりした人物です。もし彼が『東京朝日』と『大阪朝日』に政治問題に関する記事を書けば、日本の一般大衆に対して大きな影響力を持つことになるでしょう。¹¹³」

熱しやすく冷めやすい二葉亭の一面を的確に捉えた評言である。

二葉亭は 1908 年夏に『朝日新聞』特派員としてペテルブルグに赴き、そこでマリアに会うが、ピウスツキとの再会はならなかった。翌 1909 年 6 月 1 日にピウスツキは、次のように始まる手紙を二葉亭に書いた。

「深く尊敬する親愛なる長谷川さん あな

たの発病と突然の帰国を妻から知り、悲しくて堪りません。これでこのヨーロッパでお会いできなくなりました。それを私は心から望んでいたのですが。¹¹⁴」

だがこの時点で二葉亭はこの世の人ではなかった。同年2月21日に二葉亭はヴラジーミル大公の葬儀に参列して風邪をこじらせ、肺炎と肺結核を発症した。そして5月10日、船で帰国の途次、ベンガル湾上で死去したのである。

ピウスツキはペテルブルグの人類学民族学博物館に勤務するL. Ia. シュテルンベルグとペテルブルグ在住の姪を通じて、二葉亭の追悼記事を掲載してくれる新聞・雑誌を探した。『ロシアの富』は掲載を断わり、『ロシア報知』紙へはピウスツキは記事を送らなかった¹¹⁵。結局この追悼記事は「シギ 長谷川」という表題で1910年にポーランドの雑誌『世界』第12号に発表された。以下にその一部を紹介する。

「長谷川は日本のもっとも優れた文学者の一人であり、ロシア語とロシア文学の専門家であり、ロシア作家たちの作品の最初の、そして同時に最良の翻訳者だった。[中略]彼は着手した仕事をそこ[ペテルブルグ]で止めはしないと手紙で約束してくれたが、運命はその仕事の継続ばかりか、生命の糸をも断ち切ってしまった。

彼の死とともに、ポーランド語をマスターし、直接ポーランド語から日本語に翻訳ができて、人種的、地理的には遠いが、多くの点で互いにきわめて近い二つの民族の間の精神的な絆を保つことができる作家を日本で短期間に得る、という望みは消えてしまった。長谷川はロシア語がとてもよくできたので、少なくともポーランドの作家の作品を原文で読む程度には、大した苦労もなしにポーラン

ド語を習得することができただろう。彼はもうペテルブルグに来たのだから、そのポーランド来訪は単に時間の問題だった。

このすばらしい、我々にとってかくも魅力的な役割のために、誰か他の人間を見つけることは今やずっと困難になるだろう。それ故私は、わが民族に対して心からの友情をいだき、それを行動によって立証しようとした気高い人物の逝去を心から悼むのである。¹¹⁶」

6 日本の社会主義者

ピウスツキは日本の社会主義者とも接触もあった。1906年2月6日の夜、神田三崎町の「吉田屋」でアメリカから帰国した片山潜の歓迎会が開かれたが、その時ピウスツキはこれに出席し、加島汀月の通訳でロシア語で演説した。加島汀月、本名・加島^{あきら}斌はニコライ神学校の出身で、日本正教会の数多くの聖書注解や教書類を訳出した人物である。彼は1903年7月に神学校を卒業し、日本ハリストス正教会の出版社「愛々社」に宗教書の翻訳者として入社した¹¹⁷。ニコライ主教は加島の仕事ぶりを高く評価していた。

「『福音経』を「端」に分ける仕事が終わった。「使徒経」も終わった。この仕事はアキラ加島がたいへんよく助けてくれた。教会内で使用する「福音経」と「使徒経」を印刷しなければならぬが、アキラ加島はそれも手伝ってくれることになっている。慎重と精確が求められる仕事だが、かれにはその素質があるが。¹¹⁸」(1904年6月10日(23日)の日記)

1905年10月に社会主義者の団体「平民社」が解散し、キリスト教派が『新紀元』、幸徳秋水、

堺利彦、西川光二郎、山口孤剣らが『光』と分裂して、それぞれ新聞を出すことになった。その『光』の前日発行の号にこの歓迎会の予告が載っている。それには、「...尚ほ同日波蘭人にて国事犯の為十二年間樺太に流罪となりたる同志も出席すべし」とある。また当日の『毎日新聞』にも、「今6日午後6時より神田三崎町三の一吉田屋に於て片山潜氏の歓迎会を開き露国社会党员一名出席の筈」との予告が掲載され、ピウスツキの出席が一種の「出し物」として会に彩りを添えるものだったことが分る。彼の演説の要旨は以下のとおりである。

「予は小学校に通う時社会主義の名を聞きて之を祖国の賊なりとせり。稍々長じて書を読むに従って社会主義の救世の大真理なることを知るを得たり。二十歳の時ポーランド革命運動に加つて国事犯に問われたり。十九年間樺太に流刑となり、今回の大赦で帰国の途次なり。社会主義は地上の天国なり、社会主義の理想国を建設するは人類の共同責任なり。¹¹⁹」

この席上、幸徳秋水夫人・千代子は絹手巾に老梅を描いて彼に贈った¹²⁰。ピウスツキは帰ってきて、社会主義者の集まりといつても労働者がいないと不思議がったのに対し、二葉亭は、「『日本の社会主義は学生の社会主義だ』と説明した¹²¹」という。

その後、『光』の4月5日発行の号に長崎のロシア人革命家グループに関する記事が、また5月5日の号には『ヴォーリャ』発刊の紹介と、無政府主義者で『長崎新報』主筆の久津見巖村によるヴァデーツキイの詳しい紹介記事「露国の革命家」が掲載された。

ピウスツキは堺利彦、加藤時次郎とも交わつた¹²²。ピウスツキは堺の家を2月中旬に訪問し

たが、堺はピウスツキの印象をこう述べている。

「氏は其年未だ三十九歳といふのに、兩鬢既に多く霜を宿して、多年苦勞の痕を示して居るが、それにも似ず極めて無邪気な、極めて人の善い、親みやすい人物である。¹²³」

堺によると、ピウスツキは異人種間の結婚を大いに推奨し、翌日よこした手紙に、堺の娘の夫をポーランドで探すと書いてあったという。その返信であろうか、堺のピウスツキ宛英文書簡が残っている。それによると、堺はピウスツキを後述の今井歌子に紹介し、また幸徳千代子との連絡役をつとめていたようだ¹²⁴。翌1907年2月3日付の書簡でラッセルはピウスツキにこう書いている。

「[印刷] 機器購入のためクラルクを東京に遣りました。東京で出ている新しい社会主義者の新聞『平民新聞』の発行者堺が購入を手伝ってくれています。私は時々彼らに自分の論文を送っています。堺と『平民新聞』の宛先は、東京京橋区新富町7丁目です。¹²⁵」

『新紀元』は1906年11月に廃刊となり、『光』派と合同して1907年1月から日刊『平民新聞』を出し始めたのである。

加藤は「平民病院」の院長で、幸徳秋水の主治医をつとめ、『光』の経済的スポンサーでもあった。この病院は「箱館屋」の近く、木挽町6丁目10番地(現在の銀座7丁目12番)にあり、内科、外科、皮膚科、梅毒の診療科があった¹²⁶。1906年2月24日の日本社会党第一回大会はこの病院で開かれた。12月に加藤はロンドン留学へ出発し、翌1907年8月にドイツのシュトゥットガルトで開催された第7回万国社会党大会に日本代表として参加した¹²⁷。このことはピウス

ツキも把握しており、同年5月10日付の書簡で二葉亭にこう書いている。

「ドクトル・加藤が（スイスの）ベルンから手紙をくれました。私はかれと奥さんをこちらへ招待したいと考えています。弟がちょうどヨーロッパを巡歴するので、かれが直接来て、わが友を招待する予定です。¹²⁸」

またラッセル宛の書簡（年月日不明）でも加藤に言及している。

「社会主義者世界大会の日本代表加藤医師が私に手紙をくれまして、私は彼と多分夏に会えるでしょう。¹²⁹」

ピウスツキと加藤のヨーロッパでの再会が成ったかどうかは不明である。

堺と親交があり、幸徳から強い影響を受けた小説家に上司かみつかさしやうけん小剣がいる。上司はある時ピウスツキらと銀座のレストランで会食する機会があったが、その折りの印象をこう書いている。

「口髭のある、額の抜け上がった、小づくりな男。彼れは粗末な料理をうまさうに食ふ。ピュルスドスキイ『オバラヴァン、…わたくし、函館で、…』と、身振り手振りに、面白い恰好を見せて、ゆっくりしたフランス語で話す。[中略]時々ロシア語を混ぜる。これは極めて早口に聞える。」

日本で何が珍しいかと訊かれて、ピウスツキは、「□□の起らぬことゝ、電車へ隣り同志（マ）に乗り合はした日本人たちが、仇敵のやうにして睨み合つたり、素知らぬ顔をしたり、一言も物を言はぬことです。」と答えたという¹³⁰。

ピウスツキは二葉亭の紹介で石川三四郎、阿部磯雄、木下尚江、福田英子、横田兵馬など、『新紀元』社の面々とも交際した。そして2月25日には神田小川町のすきやき屋「いろは」（または「常盤」）で開かれた、月に一度の晩餐会に出席して、一同と写真撮影を行った。「いろは」は「いろは牛鳥肉店」のことで、東京市内に20数軒のチェーン店があり、神田区連雀町18番地に「第六いろは」があった。ピウスツキは『新紀元』社の人々と何度か会食したようだ¹³¹。横田は陸軍幼年学校を中退して、この前年に第一高等学校に入学した。同級生だったフランス文学者・辰野隆ゆたかはこう回想している。

「横田はすでに入学前からソシアリストとして、幸徳秋水や堺枯川〔堺利彦のペンネーム〕や荒畑寒村や大杉栄と交わり、一高入学後も、時々本郷の警察署から呼び出されたり、検束を食ったりしていた。僕等同級の二三の友が平民新聞の購読者になったり、クロポトキンの書物を巴里のストック書房から取寄せて読むようになったのも全く横田の影響であった。彼は二年の末ごろから胸の病に罹って学校の方もだんだん欠席がちになったが、三年に進んでから遂に病があらた革まって没した。¹³²」

横田は一高入学以前からフランス語が堪能だった¹³³。彼は3月30日にピウスツキにフランス語の葉書を送り、「予定どおり、4月1日の午後6時にさまざまな年代のご婦人方と伺います。¹³⁴」と伝えている。「さまざまな年代のご婦人方」とは、『新紀元』社の福田英子、逸見菊枝や木下操子、あるいは若い婦人運動家の今井歌子、遠藤清きよあたりのことか。今井は北海道婦人同志会を組織し、1904年2月にその機関誌『二十世紀の婦人』を創刊。やがて社会主義者と交渉を持

つようになって、婦人に政治上独立の人格を認めない治安警察法第五条改正の請願運動を、福田英子とともに展開した女性である。この運動を後に支えたのが遠藤清。後の『青鞥』同人で、1909年に作家・岩野泡鳴と結婚した。二人を結びつけたのは今井である¹³⁵。だが清は夫と青鞥社員・蒲原英枝との関係を知って離婚。後年、洋画家・遠藤辰之助と再婚した。1906年11月21日付の書簡でピウスツキは二葉亭に、ハルトマンを訪ねたこと、この人物は福田の本を翻訳していることを伝え、「私の出発後の『新紀元』を全号欲しいとも伝えて下さい。出発の時送料はおいてきました。¹³⁶」と依頼しているが、その10日前に『新紀元』は終刊となっていた。

ピウスツキは高野岩三郎にも交流を求めた。高野は統計学者で、労働運動への助言・指導と労働者教育の分野でも先駆的役割を果たした。彼は1899年より4年間ドイツで社会統計学と経済学を学び、東京帝国大学法科大学統計学講座の教授となった。同大学法科大学の便箋に認めた高野のピウスツキ宛ドイツ語書簡(日付不明)が残っており、それによると、ピウスツキが高野に書簡を送り、自ら何度か大学をも訪問したが、会えなかったことが分かる¹³⁷。

7 ピウスツキの民族学研究と日本の民族学者

ピウスツキの第二の、そしてアイヌ関係では最初の学術論文が、日本語で日本の雑誌に発表されたことは特筆に値する。まず月刊誌『世界』の1906年6月号に、ピウスツキ撮影の樺太アイヌの写真4葉とピウスツキ自身の写真1葉が載った。前者の内訳は、熊祭りが2葉、チュフサンマと思しき女性を含む3人の女性と2人の子供の集合写真が1葉、2人の酋長の写真が1葉、後者には「露国人類学者ピルスドスキー(ママ)

氏樺太アルコウオ村の叢中にギリヤク人を集め歌を聞き取りて書き取る所」というキャプションが付いている。これは、『極東の自然と人々』誌第24号(旧暦7月9日)所載の「異民族のなかのB. O. ピウスツキ」に添えられた写真と同一のものである。そして『世界』7、8月号に論文「樺太アイヌの状態」が、彼の写真とパフンケの写真(7月号)、樺太アイヌの「疫病祓いの祈祷」と「熊祭見物の図」の写真(8月号)各1葉とともに掲載されたのである。本論文は、ポーツマス条約で南サハリンを獲得した日本当局の問い合わせに対する回答という側面をもってしたが、同時にピウスツキとしては本論文によって日本社会にアイヌ人の悲惨な状態を知らせたかったのだろう。『世界』誌への掲載のいきさつは不明だが、同年1月号に後述の鳥居龍蔵の論文が載っているの、あるいは彼の紹介によるものか。本論文が活字になったのは、ちょうどピウスツキの離日前後の時期にあたるが、彼はそれを目にしていなかったらしく、その結果と反響を11月21日付の書簡で二葉亭に問い合わせている。

「『世界』誌で、アイヌ人の状態を書いた私の論文の翻訳を読まれましたか。それは簡約化された草稿から訳されたもので、しかもそれを上田がどう訳したか私は存じません。それに対して批評はありましたか。どんなでしたか。¹³⁸」

論文の訳者は^{オナシ}上田将(1860?-1912)。盛岡出身の上田はニコライ神学校第二期生としてロシア語を学び、「愛々社」の翻訳員となって数多くの聖書注解や教書類を訳出した¹³⁹。前記加島の同僚にあたる。『日露実用会話』(1896年)、在日ロシア人俘虜のための『日露会話捷徑』(1905年)のような著書もある。ニコライは上田の翻

訳を高く評価していた。

「マトフェイ上田はうちでは最も腕のたつ翻訳者だから、いま抱えている『クロンシタートのイオアン師の日記』をかれが終えてしまったらすぐに、金口イオアンの翻訳を引き受けてくれるように頼んでみよう。[中略]上田がやる気を出すように、翻訳料として一卷（製本すると二冊になる）につき 100 円支払い、通常の給料に上乘せする。¹⁴⁰」（1900 年 12 月 31 日（1901 年 1 月 13 日）の日記）

また上田が亡くなった時に日本正教会の機関誌『正教新報』に載った訃報にはこうある。

「上田氏の露語に精通せられたる其譯文の平易明瞭なることは世間既に定評ありて我等同人の常に敬服に堪へざりし所なり¹⁴¹」

ピウスツキは上田と 1906 年 1 月下旬頃に知り合ったようだ¹⁴²。当時上田は『東京日日新聞』の記者をもつとめ、『ヴォーリャ』創刊号から第 46 号（8 月 7 日）まで、東京での予約講読と広告の受付をしていた。ピウスツキは 3 月 3-4 日付のラッセル宛書簡にこう書いている。

「上田が当地で、オルジフのために注文して彼に送ったいくつかの品物の支払いのための金を今か今かと待っていますし、恐らくは自らもオルジフが自分に約束した給料を待っています。¹⁴³」

ピウスツキは 10 月にニューヨークから長崎の同志宛に、「上田は『ヴォーリャ』の代理人をやめたのですか。¹⁴⁴」と問い合わせている。上田は二葉亭や神学校関係者、亡命ロシア人、中国人革命家等と広い交際範囲を持ち、11 月の東京・牛込

での孫文と社会革命党^{エス・エス・エル}の創設者 G. A. ゲルシューニの会談の通訳をつとめたのも彼である¹⁴⁵。

「ピウスツキ・マニユスクリプト」中に、上田がピウスツキに宛てた手紙と葉書が一通ずつ残っている。手紙は 7 月 19 日付のもので、自分は長崎に行けないこと、『モンゴルとモンゴル人』の翻訳を頼まれたこと、現在ニコライ主教が正教会の司祭と伝教者を東京に集めており、湊^{みなと}氏が色丹島から到着したこと、ガルフィリド氏が今朝横浜から長崎に向かったこと、自分によく「箱館屋」に寄ってピウスツキのうわさをしてきたこと、横浜に停泊したら電報を打ってほしいこと、『世界』誌は既にピウスツキに発送済みであり、『世界』次号用のもう一つの鉛版が出来上がった時点で鉛版を送るつもりであることを伝えている¹⁴⁶。『モンゴルとモンゴル人』は A. M. ポズドネーエフの著書で、この翻訳は 1908 年に東亜同文会編纂局翻訳『蒙古及蒙古人』（東亜同文会）として出た¹⁴⁷。「湊氏」とは、日本正教会の根室地方の伝教者モイセイ湊福太郎のことである。彼はたびたび色丹島に出かけて越冬し、かの地で正教の教えを広め、仏教の伝道者と闘い、クリール人に父親のように慕われていた。1909 年 7 月に湊は輔祭セラフィムに叙聖された¹⁴⁸。

葉書の方は 1907 年 7 月 1 日付で、ピウスツキから手紙を受け取ったこと、ポドパーフが家族と東京にいて、ロシアの諸新聞のために特派員通信を書いており、日本の新聞からの翻訳を自分が手伝ってやっていること、『ジャパン・タイムズ』と社会主義者の雑誌の近刊をピウスツキに送ったこと、最近神保^{じんぼ}[神保小虎]氏に会い、彼がピウスツキの手紙を受け取ったと言っていたことを伝えている。なお葉書の方の署名は「M. ウエダ」になっているが、筆跡からしてこれは明らかに同一人物であって、「M」は上田の洗礼名「マトフェイ」を指すのだろう¹⁴⁹。

「ピウスツキ・マニユスクリプト」には、宛先が上田になっている書簡がもう一通残っている。それは煙山^{けむやま}専太郎の、1906年2月25日付の書簡である。煙山はこの3年前に東京帝国大学文科大学哲学科を卒業し、早稲田大学で西洋近世史、最近世史、政治史を講じていた。この書簡は上田とピウスツキの面会申し込みに対する回答で、2月28日の午後1時に早稲田大学で会おうという趣旨のものである¹⁵⁰。

これらの上田宛書簡からして、ピウスツキの東京滞在中上田が彼をいろいろな場所に案内し、さまざまな人々に引き合わせていたことが推測される。上田はピウスツキ宛の葉書で、ポドパーフのために日本の新聞の翻訳を手伝っていると書いていたが、ピウスツキが『極東の自然と人々』に「日本より」を連載する際にも同様の援助がなされたのかもしれない。

ピウスツキは日本を去るにあたって、ゴリド人コレクションの簡略な解説と、2本の長大な論文「樺太アイヌの経済状態概説」と「樺太アイヌ統治規定草案」をウラジオストクの「アムール地方研究協会」に送付している¹⁵¹。ゴリド人コレクションとは、前年11月にアムール川下流域にあるゴリド人のトロイツコエ村とその周辺地域で彼が収集した一大コレクション（もとは376点あった）のことである。ピウスツキは日本滞在中にこれらの仕事を仕上げたものと思われる。上記『世界』誌掲載の論文は、ピウスツキの処女論文である「樺太アイヌの経済状態概説」の抄訳にほかならない。ロシア語原文の方は、彼の第二の論文「樺太の個々のアイヌ人集落に関する若干の情報」とともに、1907年に『アムール地方研究協会紀要』に発表された。

1906年7月27日、ピウスツキは日本を去るにあたって、ポドパーフとの間に絵葉書の材料として47葉の写真の売買契約を結んだ。内訳は、アイヌの写真が34葉（「チュフサンマと女の子

と題するものを含む）、サハリンの景観が4葉、ギリヤークが8葉、オリチ（ウリチ）が1葉である。契約条件は、ポドパーフがピウスツキに初版は1,000部につき10ルーブル、それ以降の版では5ルーブルを支払う、そして年に一度ポドパーフがピウスツキに出版した絵葉書と売れた絵葉書の数を報告し、それに相当する額の金を支払う、というものである¹⁵²。だがその後ポドパーフからピウスツキへの連絡はなかったようで、ピウスツキは1907年2月11日付のラッセル宛書簡でポドパーフの動静を尋ねている¹⁵³。同年12月10日付の二葉亭宛の書簡にも、ピウスツキはこう書いている。

「時々ポドパーフと会われるとのことですが、彼のことが気になっていますので、かれが今していることを知りたいものです。かれ自身手紙をくれれば一番よろしいのですが。かれはアイヌやギリヤークの写真をかなり沢山私から借りて行きました。それらをロシア向けの絵葉書にして発行したいといっていました。年に一度決算して、規定分を私に支払ってくれるはずでしたが、しかしもう一年か一年半以上も経つというのに、これについて沈黙しています。ほとんどこの一年間全く返事さえありません。—もしよろしければ、内々調べていただけませんか。—たった今かれの手紙を落手しました。今のところ何もしていないと書いています。病気をし、しかもまだ、ウラジオストクの印刷所を売った代金を受け取っていないようです。三種類の新聞に寄稿しているとも書いています。¹⁵⁴」

一方ポドパーフは1908年1月22日にピウスツキに手紙を書いた。

「私はついに雑誌を創刊しました。その創

刊号をこの手紙と一緒にあなたにお送りします。[中略] さてあなたはアイヌに関する一、二の論文のための資料を提供してくださいとお願いしたいと思います。そうすれば今までオガワのもとに保管されているあなたの写真を私は利用することができます。¹⁵⁵」

「雑誌」とは『^{ヴオストロク}東洋』のことである。「オガワ」はポドパーフの1906年10月14日付のピウスツキ宛書簡にも、「近日中にオガワのところに行きます。¹⁵⁶」と便箋の欄外に言及されている。これは当時の日本写真界の第一人者・小川一真のことだろう。小川は1882年に渡米し、かの地^{かづまさ}で3年間写真術を研修した後、帰朝して開業した。彼は写真製版や印刷業も手がけた¹⁵⁷。この書簡を受けて、ピウスツキは1908年3月9日付の二葉亭宛書簡にこう書いている。

「ポドパーフが『^{ヴオストロク}東洋』紙を送ったと知らせてきましたが、まだ受け取っていません。非常に興味を持っています。アイヌについて二、三論文を頼まれました。¹⁵⁸」

ピウスツキはポドパーフの依頼に肯定的な回答をしたようだ。ポドパーフは同年4月21日付の二葉亭宛書簡にこう書いている。

「ピウスツキより手紙をもらいました。雑誌に協力したいといってきました。¹⁵⁹」

だが同じ書簡でポドパーフは二葉亭に自己の破産を伝えている。

ピウスツキは日本の民族学者やアイヌ研究者にも積極的に交際を求めた。彼が初めて横山源之助のもとを訪れたのは、東京帝国大学理科大学人類学教室で坪井正五郎博士の研究談を傍聴

した帰りのことである¹⁶⁰。坪井は人類学者、考古学者で、「東京人類学会」の会長をつとめ、吉見百穴住居論を主張した。ピウスツキの論文「サハリン島の原住民」(1909年)には、坪井の先住民族コロボックル(アイヌ語で「フキの葉の下の人」の意)説が引用されている。また1908年3月9日付の二葉亭宛書簡でピウスツキは、坪井教授らがサハリンを旅行したとの便りを受けとった、写真を撮っただろうからそのコピーを入手してほしい、と書き送っている¹⁶¹。ちなみにこの旅行中、坪井一行は東海岸のパフンケの家^{かづまさ}に一夜の宿を求めた¹⁶²。1911年から翌年にかけて坪井は海外視察のため欧米に派遣された。このことはピウスツキが日本からの手紙で知っていたようで、1911年11月2日付と1912年1月5日の消印のあるシュテルンベルグ宛の書簡で繰り返し坪井のヨーロッパでの所在を尋ね、彼に会いたい旨を伝えている¹⁶³。さらに坪井は1913年5月に第5回万国学士院連合大会に出席のためペテルブルグに赴くが、急性腸疾患を発して同月26日にかの地で死去した。

東京帝国大学理科大学講師の鳥居龍蔵とも、ピウスツキは上京早々に交わりを結んだ。鳥居は少年時代に考古学に興味を抱き、坪井に師事して人類学と考古学を学んだ。鳥居はニコライ神学校の生徒からロシア語を学び、辞書を引きながらロシア語を理解することができた¹⁶⁴。2月8日の『東京朝日新聞』に「露国人類学者」と題してピウスツキ紹介の記事が載ったが、それによると鳥居はピウスツキを東京北豊島郡西ヶ原の貝塚に案内し、土器の破片や石器などの表面採集を試みた。ピウスツキは毎日東京府下の骨董店を廻って、研究資料を収集していたという¹⁶⁵。7月30日にピウスツキは長崎で「ダコタ号」に乗船してシアトルを目指したが、同日神戸付近の船上でB. ディボフスキに書簡を書いた。ディボフスキはポーランド人の生物学者、

動物学者、医者で、1863年のポーランドの一月蜂起の後に東シベリアへ流刑となった。ピウスツキはこう書いている。

「当地で私はある日本人の民族学者と知り合いになりました。この人物は千島列島に出かけ、かの地のアイヌに関する本を著しました。それは鳥居氏です。彼はあなたの小辞典のことを知りませんでした。私は彼に小辞典のことを教え、ガリツィアから取り寄せようとしました。現在この人はモンゴルに出かけています¹⁶⁶。」

1911年に鳥居は「サハリン島の原住民」をドイツ語版から訳出して、『世界』、『人類学雑誌』、『北斗』の3誌にほぼ同時に発表した。この論文には、鳥居の著書『千島アイヌ』(吉川弘文館、1903年)からの引用がみられる。

ピウスツキは鳥居の妻・君子とも親交を結んだ。1906年2月9日の夜、大雪についてピウスツキが鳥居家を訪問したが、龍蔵は既に就寝していて会えなかった。翌日その詫び状を君子はフランス語混じりのローマ字表記の日本語で書いて送った¹⁶⁷。その後君子は蒙古カラチン王府女学堂の教師に招かれることが決まった。そして3月5日に彼女が東京・新橋駅を発つ時、ピウスツキは見送って、彼女に写真を手渡した。後に君子が出発の情景を回想しつつ、「勇ましき諸声して『鳥居夫人萬歳』と呼ぶるゝもうれしく覚束なき日本語もて『サヨナラオクサン』と帽子捧げて呼ぶ露西亞人も亦愛らしく¹⁶⁸」と書いた「露西亞人」とはピウスツキのことである。君子は門司の船中から彼にローマ字表記の日本語の礼状を認めている¹⁶⁹。龍蔵も遅れて蒙古へ赴き、君子は堪能な蒙古語で、夫の蒙古、満州の調査には欠かせぬ助手をつとめた¹⁷⁰。

その他ピウスツキは2月14日に「北海道土人

教育会主任 米国文学博士」小谷部全一郎から、北海道虻田の彼の自宅に滞在してアイヌ研究をしないか、という誘いを受けている¹⁷¹。小谷部はわが国で初めてアイヌ人のための実業学校を設立し、自ら教壇に立っていた。また関場不二彦、村尾元長、神保小虎とも、ピウスツキは独文、英文等で書簡のやりとりをした。関場は外科医、医史学者で、札幌に「北海病院」を開設し、北海道医師会の初代会長をつとめた。2月20日に関場は札幌からピウスツキに自分の著書『あいぬ医事談』を送付した¹⁷²。村尾はかつて開拓使、北海道庁につとめ、アイヌ研究者でもあった。神保は地質・鉱物学者で、東京帝国大学理科大学鉱物学講座の教授にして日本地質学会会長¹⁷³。この年にサハリン島北緯50度線地域の地質と地理を調査した。神保はアイヌ語を巧みに話した。

1910年にピウスツキはロンドンでM. コイデという日本人と交流をもっていた。この年にロンドンで英日博覧会が開かれ、ピウスツキは北海道沙流地方から来たアイヌ人たちから聞き取り調査を行なったのである¹⁷⁴。コイデはピウスツキに東京帝国大学医科大学解剖学教室の小金井良精教授が9月にロンドンを訪問することを知らせ、両者の面会を仲介しようとしたが、これは不首尾に終わった。小金井は解剖学者、人類学者で、アイヌ研究の第一人者であり、石器(縄文)時代人はアイヌだったとするアイヌ人説を唱えた。その後小金井が11月にベルリンに滞在する予定であることをコイデは伝えているが¹⁷⁵、ピウスツキが小金井を訪問したかどうかは不明である。ピウスツキは後に主著『樺太アイヌの言語と民話についての研究資料』(1912年)の序文に付した文献中に、小金井の「アイヌ人の形質人類学的考察」という1893-1894年のドイツ語論文を挙げている。

8 サハリンとのつながり

サハリンを去った後もピウスツキを島に結びつけていた人間が、彼のアイヌ人家族以外に二人いた。一人はナイブチのアイヌ少年・千徳太郎治である。千徳は1872年に日本人の父と樺太アイヌの母との間にナイブチで生まれ、北海道江別市の対雁^{ついでかり}に移住した後、そこから引き揚げて来て日本語ができたが、ピウスツキは彼にロシア語を特訓した。千徳が日本滞在中のピウスツキに送ったキリール文字表記のアイヌ語書簡が3通残っている。1通目は1906年6月4日に書いたもので、ピウスツキの書簡を受け取ったこと、バフンケが漁場の番屋を日本人に取り上げられたこと、今後の生活がどうなるのか、様子を確かめるために彼が東京へ行ったこと、チュフサンマは女兒を出産し、ピウスツキに会いたがっており、再婚していないことを伝えている。2通目は6月15日に書いたもので、2月4日付のピウスツキの書簡を今受け取ったことを伝えている。3通目は8月11日に書いたもので、神保〔小虎〕から書簡を受け取ったこと、千徳は前年に2回東京のピウスツキへ書簡を送ったこと、函館で千徳のお婆の夫である日本人が裁判にかけられたので、沢が函館へ行ったこと、バフンケからの言伝として、ピウスツキの持ち物を昨年コルサコフまで運んだが、イノガワが帰ってしまった後だったので、また持ち帰ったことを伝え、こう続けている。

「バフンケさんもあなたを待ち続けています。あなたの子供2人は本当に元気でいます。チュフサンマは、ニシパの子供であるから、男の子一人、女の子一人本当にニシパに似ている、顔も似ている、今はチュフサンマも元気で暮らしています。毎日ニシパだけを待っています。〔中略〕ニシパの子供たちにも会ってや

りなさい。〔中略〕一体あなたは妻子を忘れてしまったのでしょうか。一体どういうわけで、こんなふうにあなたが子供をつくった女性が（こんなふう）本当にかわいそうなことになったのでしょうか。¹⁷⁶」

「沢」は漁業家・沢克己のことだろう。この人物は1891-1892年頃ウラジオストクに渡航し、かの地の宮本商店の支配人として働き、その後は達者なロシア語を生かして露領漁業の開拓に従事し、日本人の漁業権の獲得やその施設経営に成果を収めた。沢の住む函館市青柳町の小路は「露探小路」と呼ばれたが、逆に彼は密かに日本軍部のために働き、内田良平と親密な間柄にあった¹⁷⁷。千徳の3通目の書簡は日本からガリツィアへ転送されたのだろう。

もう一人は、ピウスツキの書簡のやり取り中に何度か登場する「T. イナカワ」である。ピウスツキは長崎のラッセルを通じてイナカワと連絡を取ろうとした。ピウスツキの1906年12月3日付のラッセル宛書簡にはこうある。

「イナカワの手紙を同封します。この人物には私の推挙で『ヴォーリャ』を送っていたのですが、彼の現住所へ、もし彼が移っていなければ、サハリンへ転送してくださるようお願いいたします。〔中略〕イナカワに私の荷物をサハリンからあなたに届けるよう頼んであります。かの地にある写真機はペトローフスキイのもので、残りは本ですが、それを私は受け取りたいのです¹⁷⁸。」

一方ラッセルは1907年2月3日付のピウスツキ宛書簡にこう書いている。

「イナカワ宛のあなたの手紙は、直ちにサハリンのコルサコフスクへ郵便で発送しましたが、

かの地に彼がいるかどうかは知りません。¹⁷⁹⁾

ピウスツキは二葉亭を通じてもイナカワと連絡を取ろうとした。1908年3月9日付の二葉亭宛書簡にピウスツキはこう書いている。

「友人の T・イナカワ (かれはあなたのかつての教え子の山口の友人です) の消息がわかりません。かれはサハリンと函館に住んでいました。幾度かかれに手紙を出しましたが、返事がありません。¹⁸⁰⁾

その後ようやくピウスツキはイナカワと連絡が取れた。ピウスツキのラッセル宛書簡 (年月日不明) にはこうある。

「イナカワが手紙をよこしまして、彼は函館にいます。すばらしい若者で、我々の解放運動に心から帰依しており、リュドミーラ・アレクサンドロヴナ・ヴォルケンシュテインの教え子です。彼の住所は、函館市青柳町 44 番地です。私は彼にサハリンから、ほとんど大部分が本である私の荷物を入手してくれるよう頼みました。もし彼があなたに送ってくれば、どこかの営業所を通じてオーストリアのロイドの汽船か、個人的にこちらに来る人たちに託すか、あるいは義勇艦隊で発送してください¹⁸¹⁾。」

これは函館の漁業家・稲川猛 (竹治) のことである。彼はサハリンの漁業組合の職員で、ロシア語通訳だった。「函館市青柳町 44 番地」の所有者は樺太漁業家・村上祐兵で¹⁸²⁾、稲川は村上の養子になっていた。稲川は自分の論文の冒頭でこう自己紹介している。

「元コルサコフに居住し、薩哈唎島出稼漁

業者の代表者たること数年、屢々日露漁業者の間に介在して内外交渉の任に當り、後年露人の租借漁場賃借のことに加はり営業をなしたりしが、...¹⁸³⁾

稲川は一時「数十名の徒刑殖民を雇役し」というから、あるいはその折りにピウスツキやヴォルケンシュテインと出会い、革命思想に触れたのかもしれない。稲川はロシアの水産業界視察のために、1903年10月末に函館を出発して、ウラジオストク、モスクワ経由で翌年2月中旬、即ち日露戦争勃発直後にペテルブルグに到着した。彼は各所で歓迎され、ハバロフスク総督府漁業主任官 V. K. ブラージュニコフや、かつて朝鮮・サハリン島漁業調査会長をつとめた博物学者 P. Iu. シュミットと面談した。稲川はこの二人とは既にコルサコフ港で面識があった。ブラージュニコフの名はピウスツキの論文「樺太アイヌの状態」に、またシュミットの名は「サハリン島の原住民」にそれぞれ登場する。つまり、この二人はピウスツキと稲川共通の知人だったのである。稲川はその後ベルリン経由で帰国した¹⁸⁴⁾。

ロシア科学アカデミー文書館ペテルブルグ支部所蔵のシュテルンベルグの個人フォンドに、稲川が 1906 年の正月前に函館市の自宅からペテルブルグの「ワシーリエフスキ島の大学付属民族博物館」宛に送った 2 通の絵葉書が残っている。1 通はシュテルンベルグ宛で、クリスマスと新年の祝辞を述べ、「機会がありましたら、私の住所をあなたの友人のピウスツキにお伝えください。」と書き添えている。もう 1 通はピウスツキ宛で、同じくクリスマスと新年の祝辞を述べ、「ニュースを書いてください。どう過ごされていますか。[中略] 弟さんによろしくお伝えください。¹⁸⁵⁾」と書いている。だがこちらの葉書は名宛人には届かなかった。稲川はこの頃ピ

ウスツキが来日していたことを知らなかったの
である。ピウスツキは稲川からの連絡を待って
いた。ピウスツキは自分の荷物をサハリンのア
イ・コタンの家族のもとに残してきたので、稲
川から家族の情報も得たかったのだろう。但し、
ラッセルと二葉亭がこのアイヌ人家族のことを
どの程度まで把握していたかは不明である。

結 び

7 カ月半の日本滞在がピウスツキの全生涯に
おいていかなる意味をもつか、一言で語るのは
難しい。しかしながら、それがきわめて異例の、
長い滞在期間であることは間違いない。元来シ
ベリアやサハリンの徒囚囚にとって日本とは、
徒囚地からの脱出路の途上にあるエキゾチック
な島国にすぎなかった。しかるにピウスツキが
結果的に7カ月半も滞在したという事実は、彼
の日本での居心地の良さを物語るものだろう。
恐らく彼は少なからざる物質的、精神的援助を
受けていたのであり、その点で二葉亭と上田が
果たした役割は大だったろう。それを暗に示す
ような証言を最後に引用して、本論文の締めく
くりとしたい。

1914年、第一次世界大戦必至の気配を察して、
ピウスツキはクラブからウィーンへと逃れた。
ロシア軍のガリツィア進駐を恐れたものと思わ
れるが、多分その途次であろう、同年6月末に
彼はブリュッセルで『新紀元』派の社会主義者・
石川三四郎と再会した。石川はピウスツキの離
日後社会主義活動のかどで数度にわたって投獄
され、1913年3月に日本を脱出して、約8年に
わたるヨーロッパ放浪の旅に出た。ブリュッセル
に半年暮らし、ロンドン郊外に半年暮らし、
再びブリュッセルに戻って、フランスの地理学
者でアナキストの P. ルクリュ家に落ち着いたの
は、1914年4月のことである¹⁸⁶。このルク

リュ家を、糊口の資を得るためであろう、ピウ
スツキが6月末に訪ねてきたのである。石川に
よれば、当時ピウスツキはスイスかどこかで「国
際アイヌ研究所」または「万国原始社会研究院」
を設立していたという¹⁸⁷。石川の回想は次のと
おり。

「私は彼 [ピウスツキ] の宿所を訪問した。
彼は非常に喜んで私を迎へてくれたが、私は
彼の思ひの外に老いた相貌を見出して些か驚
いた。併し様々の思ひ出話や、帰欧後の生活
状態などを聞いて、なるほど、とうなづかれ
るものがあつた。『わたしはヨーロッパに帰っ
て来てアイヌ学者として立つことになつた。
もう革命家はやめた。よい優しい婦人と結婚
したのだが、最近その家内に死なれた。』ここ
まで話して彼は如何にも淋しさうになり、眼
には一ばい涙を湛えた。そして『再婚しても
よいが、私の仕事に理解のある、金持の婦人
と結婚したい』と如何にも真じめに、淋しさ
うに語るのであつた。彼の現在が余り幸福で
ないことは直に読めた。日本にみた時は、眼
も頬も若さと柔和さとに輝やいてゐたのに、
今はその紅潮を湛へた頬の艶も消え失せて、
瞳さへ曇りがちに見へる。¹⁸⁸」

ピウスツキがパリで亡くなるのは、この4年
後のことである。石川は彼の死をルクリュ老か
ら知らされた¹⁸⁹。

本稿執筆に際し、仙台ハリストス正教会のセ
ラフィム主教、武蔵大学教授・小山ブリジット、
同講師・高橋愛、「神保町いろは」の目崎裕隆、
埼玉大学文化科学研究科院生・角山朋子の各氏
からご教示を賜った。記して感謝の意を表する。

¹ 本論文は、筆者が研究代表者をつとめた平成19～21年度科学研究費補助金基盤研究(B)「プロニスワフ・ピウスツキの評伝執筆のための実証的研究」(課題番号19320043)の研究成果の一部である。

² 暦は原則として新暦で統一した。

³ 桧山真一「ニコライ・ラッセルの知られざる手紙」、『ロシア語ロシア文学研究』21、1989年、80-82頁。

⁴ 和田春樹『ニコライ・ラッセル—国境を越えるナロードニキ』上、中央公論社、1973年、311頁；Руссель, Н. (Судзиловский, Н. К.) Письма Б. О. Пилсудскому (1906-1907 гг.). *Известия Института наследия Бронислава Пилсудского*. № 3, 1999. С. 41.

⁵ Тригопи, М. Н. После Шлиссельбурга. *Былое*. № 9, 1906. С. 56.

⁶ Пилсудский, Б. О. Письма Н. К. Судзиловскому (Русселю). *Известия Института наследия Бронислава Пилсудского*. № 3, 1999. С. 19; Маевич, А. Ф. Бронислав Пилсудский в Японии. *Вестник Сахалинского музея*. № 3, 1996. С. 226; Дударец, Г. И. Японский друг Бронислава Пилсудского (неизданные автографы Фтабатэя Симэй из Московского архива). *Известия Института наследия Бронислава Пилсудского*. № 12, 2008. С. 150.

⁷ 「東京電報 浦塩上陸解禁公報」、『東洋日の出新聞』、1905年11月15日。「ウラジオで軍隊反乱、市街焦土と化す」、『日本新聞』、1905年11月18日。

⁸ クラクフのポーランド科学アカデミー図書館所蔵のピウスツキのマニユスクリプト類は、同館が付した整理番号 (Sygnatura/ Sygn.) と頁数 (stranica/ s.) を示す。Pilsudski, B. Manuscript. Sygn. 4646, t. 1, s. 10; Тригопи. Указ. соч. С. 52.

⁹ Sierszowski, W. Bronisław Pilsudski. *Rocznik Podhalanski*. S. 21.

¹⁰ Тригопи. Указ. соч. С. 61; Письмо Л. А. Волкенштейн к М. Н. Тригопи. *Минувшие годы*. 1908, № 5/6. С. 91-92; Судзиловский (Руссель), Н. К. Послесловие к статье Джорджа Кеннана “Как велось просвещение русских солдат в Японии?”. *Каторга и ссылка*. № 2 (31), 1927. С. 170; Ратцель・N・K、高野明・藤家壮一訳注「日本におけるロシア兵士の啓蒙・後記」、『早稲田大学史紀要』1-3、1966年、119頁。和田、前掲書、下、45、50、74頁。

¹¹ Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Русселю). С. 18.

¹² Пилсудский, Б. Письма к Марии Жарновской. *Известия Института наследия Бронислава Пилсудского*. № 9, 2005. С. 86; Латышев, В. М. Сахалинская жизнь Бронислава Пилсудского: Прологомены к биографии. Южно-Сахалинск, Сахалинское книжное издательство, 2008. С. 288-289.

¹³ Pilsudski. Manuscript. Sygn. 4648, s. 10, 27; Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Русселю). С. 19.

¹⁴ 「東京築地のセントラルホテル全焼」、『時事新報』、1906年6月9日。

¹⁵ 『独立百周年(建学百二十六年)記念 東京外国語大学史』東京外国語大学、1999年、808-809頁。野中正孝『東京外国語学校史 外国語を学んだ人たち』不二出版、2008年、92、104、283、421、427-432頁。

¹⁶ Pilsudski. Manuscript. Sygn. 4646, t. 4, s. 36-37; Sygn. 4648, s. 9.

¹⁷ 佐藤勇編『東京外語ロシア会会員名簿』非売品、東京外語ロシア会、1952年、4頁。『外務省年鑑 大正二年』外務大臣官房人事課、1913年、298頁。

¹⁸ 佐藤編、前掲書、2頁。『独立百周年(建学百二十六年)記念 東京外国語大学史』、818-819頁。野中、前掲書、446、452、453、469、474頁。

¹⁹ Pilsudski. Manuscript. Sygn. 4648, s. 10; 佐藤編、前掲書、4頁。正木良一・楯岡通雄共著『大井包高』大井包高伝刊行会、1960年。『大正人名辞典』下巻、日本図書センター、1987年、1876頁。野中、前掲書、461頁。

²⁰ 現在の中央区銀座6丁目9-7の婦人服店「銀座マギー」銀座本店のある所。

²¹ 石角春之助『銀座秘録』東華書荘、1937年、130-141頁。

²² 与謝野鉄幹「箱館屋」、『鉄幹晶子全集』5に所収、勉誠出版、2003年、101-103頁。

²³ 内田魯庵「銀座繁盛記」、『内田魯庵全集 3 回想 I』に所収、ゆまに書房、1983年、32-34頁。『中央区史』下巻、東京都中央区役所、1958年、975頁。野口孝一「ピウスツキと銀座の函館屋」、『北海道新聞』夕刊、1985年12月12日、7面。小島津満江「銀座年表—書誌を中心に—明治編—」、『銀座文化研究』1、1986年、50頁。銀座文化史学会編、石川幸恵担当「明治35年 銀座の住人その4」、『銀座文化研究』4、1989年、95頁。野口孝一『銀座物語 煉瓦街を探访する』中央公論社、1997年、256-258頁。

²⁴ 桧山、前掲論文、86頁。

²⁵ Письма Б. О. Пилсудского во Владивосток (1905 - 1909 гг.) (Из архива ОИАК). *Рубеж: Тихоокеанский альманах*. № 5, 2004. С. 366; Письма Бронислава Пилсудского на Дальний Восток. *Вестник Дальневосточного отделения*

- Российской Академии наук. № 1-2, 1992. С. 171.
- ²⁶ Piłsudski. Manuscript. Sygn. 4646, t. 1, s. 62.
- ²⁷ 中村健之介監修『宣教師ニコライの全日記』第5巻、教文館、2007年、64、90-91、103頁。第6巻、122-123頁；Васкевич, П. Дневник поездки в Японию от порта Цуруга до порта Ниигата. Владивосток, «Дальний Восток», 1904. С. 300, 301, 318, 345.
- ²⁸ Piłsudski. Manuscript. Sygn. 4646, t. 1, s. 62.
- ²⁹ Аборигены о. Сахалина. *Живая старина*. Т. 70/71, вып. 3. С. 16; Die Urbewohner von Sachalin. *Globus*. Bd. XCVI, hft. 21, s. 330; [Translated by A. F. Majewicz], “The aborigines of Sakhalin”, The Aborigines of Sakhalin (The Collected Works of Bronisław Piłsudski. Vol. 1), Edited by A. F. Majewicz, Berlin & New York: Mouton de Gruyter, 1998, p. 235; Пилсудский, Б. О. “Дорогой Лев Яковлевич...” (Письма Л. Я. Штернбергу. 1893-1917 гг.). Южно-Сахалинск, Сахалинский областной краеведческий музей, 1996. С. 244-245. ピウスツキはロシア語版では著者名と書名を失念していたが、ドイツ語版では明記している。
- ³⁰ 加島汀月「年賀状のあら探し」、『裏錦』172、1907年2月、48頁。「正教神学校々友会名簿」、『正教時報』25-9、1936年9月、37頁。和田、前掲書、下、144-145、148、154、157、331頁。梶森治「回想 不思議な人の縁」、『Samovar』7、1985年2月、4頁。
- ³¹ 『二葉亭四迷全集』別巻、筑摩書房、1993年、116頁。
- ³² 中村監修、前掲書、第4巻、231頁。第7巻、176頁。第8巻、183、184頁。『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年、818頁。
- ³³ 中村監修、前掲書、第8巻、312頁。
- ³⁴ この人物については、拙稿「志賀親朋略伝」(『共同研究 日本とロシア』)に所収、ナウカ、1990年)を参照のこと。
- ³⁵ 和田、前掲書、下、107、118、119、225、320-321頁。石光真清『誰のために 石光真清の手記』中公文庫、中央公論社、1979年、72-73、204-209、258-263、275-276、300-303頁。
- ³⁶ Piłsudski. Manuscript. Sygn. 4646, t. 2, s. 4.
- ³⁷ Piłsudski. Manuscript. Sygn. 4646, t. 3, s. 82.
- ³⁸ Piłsudski. Manuscript. Sygn. 4646, t. 1, s. 32-33.
- ³⁹ Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Руссело). С. 24, 28; Пилсудский, Б. Письма в газету «Воля» из Америки и Галиции. *Известия Института наследия Бронислава Пилсудского*. № 10, 2006. С. 46, 48.
- ⁴⁰ Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Руссело). С. 25; Пилсудский. Письма в газету «Воля» из Америки и Галиции. С. 45.
- ⁴¹ Пилсудский. Письма в газету «Воля» из Америки и Галиции. С. 48.
- ⁴² 和田、前掲書、下、120頁。
- ⁴³ Piłsudski. Manuscript. Sygn. 4646, t. 1, s. 40.
- ⁴⁴ Piłsudski. Manuscript. Sygn. 4646, t. 1, s. 40-41, 81; Sygn. 4646, t. 5, s. 2; ピウスツキの1906年6月17日付の二葉亭宛書簡、『二葉亭四迷全集』別巻、116頁；Хисамутдинов, А. А. Три столетия изучения Дальнего Востока. Вып. 1. Владивосток, Дальнаука, 2007. С. 167.
- ⁴⁵ Руссель. Письма Б. О. Пилсудскому (1906-1907 гг.). С. 34-35.
- ⁴⁶ Руссель. Письма Б. О. Пилсудскому (1906-1907 гг.). С. 35.
- ⁴⁷ Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Руссело). С. 27.
- ⁴⁸ Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Руссело). С. 30.
- ⁴⁹ Руссель. Письма Б. О. Пилсудскому (1906-1907 гг.). С. 35-36; 和田、前掲書、下、185頁。
- ⁵⁰ Пилсудский. Письма в газету «Воля» из Америки и Галиции. С. 45-47.
- ⁵¹ Piłsudski. Manuscript. Sygn. 4646, t. 5, s. 1-2; Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Руссело). С. 28.
- ⁵² Руссель. Письма Б. О. Пилсудскому (1906-1907 гг.). С. 36.
- ⁵³ Руссель. Письма Б. О. Пилсудскому (1906-1907 гг.). С. 40; 和田、前掲書、下、227、241-242頁。
- ⁵⁴ 宋教仁著、松本英紀訳注『宋教仁の日記』同朋舎出版、1989年、151頁。
- ⁵⁵ 宋、前掲書、160頁。
- ⁵⁶ 宮崎竜介「「革命評論」の人々」、社会文庫編『社会主義者 無政府主義者 人物研究史料 (2)』に所収、柏書房、1966年、106、107頁。
- ⁵⁷ Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Руссело). С. 32.
- ⁵⁸ Piłsudski. Manuscript. Sygn. 4647, s. 5-6.
- ⁵⁹ Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Руссело). С. 23.
- ⁶⁰ 和田、前掲書、下、190-191頁。
- ⁶¹ Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Руссело). С. 25.
- ⁶² Руссель. Письма Б. О. Пилсудскому (1906-1907 гг.). С. 35.
- ⁶³ Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Руссело). С. 27.
- ⁶⁴ Piłsudski. Manuscript. Sygn. 4646, t. 3, s. 56.
- ⁶⁵ Piłsudski. Manuscript. Sygn. 4646, t. 4, s. 22.

- ⁶⁶ Китайская революционерка. *Воля*. № 32, 5 июля 1906 г. С. 2; 和田、前掲書、下、192 頁。
- ⁶⁷ 『二葉亭四迷全集』別巻、143 頁。
- ⁶⁸ 横山源之助「真人長谷川辰之助」、坪内逍遙・内田魯庵編『二葉亭四迷 各方面より見たる長谷川辰之助君及其追懐』に所収、易風社、1909 年、上ノ 218 頁。引用に際して旧漢字は新漢字に改め、ルビは省いた。以下同様。
- ⁶⁹ 二葉亭四迷「露国文学談片」、『二葉亭四迷全集』4 に所収、1985 年、205-206 頁。「文壇を警醒す」(1908 年)にもピウスツキの言及がある。『二葉亭四迷全集』4 に所収、242 頁。
- ⁷⁰ 拙稿「二葉亭四迷の新発見露文書簡」、『文学』10-3、2009 年 5 月、205-207 頁。
- ⁷¹ Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Русселю). С. 31.
- ⁷² 和田、前掲書、下、127-128 頁; Маринов, В. А. Россия и Япония перед первой мировой войной (1905-1914 годы): Очерки истории отношений. М., 1974. С. 93.
- ⁷³ 島田三郎「真率の人」、坪内逍遙・内田魯庵編、前掲書に所収、下ノ 111 頁。
- ⁷⁴ 横山、前掲論文、上ノ 219 頁。
- ⁷⁵ Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Русселю). С. 21.
- ⁷⁶ Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Русселю). С. 23.
- ⁷⁷ *Воля*. № 6, 7 мая 1906 г. С. 4.
- ⁷⁸ 『二葉亭四迷全集』別巻、115 頁。
- ⁷⁹ Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Русселю). С. 23.
- ⁸⁰ 『二葉亭四迷全集』7、1991 年、248 頁。
- ⁸¹ 横山、前掲論文、上ノ 219 頁。
- ⁸² Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Русселю). С. 24.
- ⁸³ 横山、前掲論文、上ノ 219 頁。
- ⁸⁴ Pilsudski. Manuscript. Sygn. 4648, s. 15-16; 『二葉亭四迷全集』別巻、116 頁。
- ⁸⁵ *Природа и люди Дальнего Востока*. № 20. С. 7.
- ⁸⁶ ピウスツキの 1906 年 11 月 21 日付の二葉亭宛書簡、『二葉亭四迷全集』別巻、120 頁。
- ⁸⁷ 『二葉亭四迷全集』別巻、117 頁。
- ⁸⁸ 横山、前掲論文、上ノ 216 頁。
- ⁸⁹ 以上、横山、前掲論文、上ノ 216-217 頁。
- ⁹⁰ 和田、前掲書、下、128 頁。
- ⁹¹ 1906 年 3 月 15 日執筆。後の単行本『凡人非凡人』(新潮社、1911 年)では「砲弾に殞れたる婦人」と改題、加筆された。
- ⁹² ピウスツキの 1906 年 2 月 14 日付のラッセル宛書簡。Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Русселю). С. 20.
- ⁹³ 『二葉亭四迷全集』別巻、115 頁。
- ⁹⁴ 1906 年 3 月 18 日執筆。5 月号の表題は「露国革命党の金主」のみ。『凡人非凡人』所収時に「露国の亡命客」と改題、加筆された。
- ⁹⁵ 『二葉亭四迷全集』別巻、125、150 頁。
- ⁹⁶ 最初の書簡は 1906 年 4 月 5 日に東京で書かれ、最後の書簡は 1909 年 6 月 1 日にリヴォフから発送された。『二葉亭四迷全集』別巻、114-164 頁。
- ⁹⁷ 1907 年 10 月 24 日にピウスツキはワシレフスキ宅を訪問している。Пилсудский. Письма к Марии Жарновской. С. 61.
- ⁹⁸ 『志士の末期』は 4、5、6、9、11、15 号 (1907 年 2 月 15 日-8 月 15 日)と 6 回連載、『愛』は 23 号 (1908 年 3 月 5 日)、『掠のミハイロ』は 24 号 (同年 4 月 5 日)に掲載。なお、従来『志士の末期』もピウスツキが帰国後二葉亭に送付したものと見なされていたが、この作品は二葉亭が長崎のオルジフから原本を借用していたことが判明した。拙稿「二葉亭四迷の新発見露文書簡」を参照のこと。
- ⁹⁹ 福田英子「二葉亭四迷氏逝く」、『世界婦人』37、1909 年 6 月、1 頁。
- ¹⁰⁰ この点については、佐藤勝「二葉亭と『新紀元』『世界婦人』-福田英子との交渉をめぐって-」(『国文学 解釈と鑑賞』28-6、1963 年 5 月)を参照のこと。
- ¹⁰¹ *My Lady of the Dance*, Tr. by F. W. Eastlake, Tokyo: Saiunkaku, 1906, 47 p.; *The Confession of a Husband*, 2 vols. Tr. by Arthur Lloyd, Tokyo: Yūrakusha, 1905-1906.
- ¹⁰² ピウスツキの 1907 年 10 月 5 日付と 1908 年 1 月 30 日付の二葉亭宛書簡、『二葉亭四迷全集』別巻、141、158 頁。A. マイェヴィチ氏によれば、『良人の自白』のポーランド語訳は見つからなかったため、恐らく本作品はポーランド語に翻訳されなかったのだろうという。The Collected Works of Bronislaw Pilsudski. Vol. 1. The Aborigines of Sakhalin, p. 31.
- ¹⁰³ 木下尚江「長谷川二葉亭君」、『神・人間・自由』に所収、中央公論社、1934 年、244 頁。
- ¹⁰⁴ 『二葉亭四迷全集』別巻、124、134、135-136、141、154、159 頁。
- ¹⁰⁵ 安井亮平「二葉亭四迷のロシヤ人・ポーランド人との交渉」、『文学』34-8、1966 年 8 月、24 頁。
- ¹⁰⁶ Дударец, Г. И. Эпистолярное наследие узников сахалинской каторги (по письмам Л. Я. Штернберга, И. П. Ювачева и других политических ссыльных). *Известия Института наследия Бронислава*

- Pilsudskiego*. № 8, 2004. С. 110-111.
- ¹⁰⁷ 『二葉亭四迷全集』別巻、170-171 頁。
- ¹⁰⁸ 『二葉亭四迷全集』別巻、147-148 頁。
- ¹⁰⁹ 『二葉亭四迷全集』7、261 頁。
- ¹¹⁰ 『二葉亭四迷全集』別巻、172-173 頁。
- ¹¹¹ Пилсудский. Письма к Марии Жарновской. С. 84, 85-86.
- ¹¹² 安井、前掲論文、25 頁。
- ¹¹³ Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Русселю). С. 32-33.
- ¹¹⁴ 『二葉亭四迷全集』別巻、163 頁。
- ¹¹⁵ Пилсудский. “Дорогой Лев Яковлевич...” (Письма Л. Я. Штернбергу. 1893-1917 гг.). С. 255, 257.
- ¹¹⁶ Piłsudski B., “Shigi Hasiegawa [sic],” *Świat*, no. 12, 1910, s. 8-9; [Translated by A. F. Majewicz], “Shigi Hasiegawa [sic],” in A. F. Majewicz & T. Wicherkiewicz, eds., *Bronisław Piłsudski and Futabatei Shimei: An Excellent Charter in the History of Polish-Japanese Relations*. Poznań: Adam Mickiewicz University, Chair of Oriental Studies, pp. 13, 14, 2001.
- ¹¹⁷ 『大日本正教会著訳出版図書目録』日本正教会事務所、1913 年。中村監修、前掲書、第 7 巻、281 頁。
- ¹¹⁸ 中村監修、前掲書、第 8 巻、86 頁。
- ¹¹⁹ 片山潜『わが回想 下』徳間書店、1967 年、165 頁。
- ¹²⁰ 「同志之運動 ●片山潜氏歓迎会」、『光』1-7、1906 年 2 月 20 日、7 面。
- ¹²¹ 横山、前掲論文、上ノ 217 頁。
- ¹²² Piłsudski. Manuscript. Sygn. 4646, t. 2, s. 4; 『二葉亭四迷全集』別巻、116 頁。
- ¹²³ 「波蘭の珍客」、『塚利彦全集』第 2 巻に所収、中央公論社、1971 年、290 頁。
- ¹²⁴ Piłsudski. Manuscript. Sygn. 4648, s. 36.
- ¹²⁵ Руссель. Письма Б. О. Пилсудскому (1906-1907 гг.). С. 39.
- ¹²⁶ 『中央区史』下巻、662 頁。野口、前掲書、258 頁。
- ¹²⁷ 「列国社会党大会」、『読売新聞』、1907 年 8 月 17 日、1 面。「年譜」、『加藤時次郎選集』に所収、弘隆社、1981 年、694-695 頁。
- ¹²⁸ 『二葉亭四迷全集』別巻、134 頁。
- ¹²⁹ Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Русселю). С. 32.
- ¹³⁰ 上司小剣『U 新聞年代記』中央公論社、1934 年、208-209 頁。
- ¹³¹ 「新紀元集会」、『新紀元』6、1906 年 4 月 10 日、23 頁。石川三四郎「ピルスズスキの想ひ出」、『石川三四郎著作集』第 6 巻に所収、1978 年、280 頁。石川三四郎「自叙伝」、『石川三四郎著作集』第 8 巻に所収、1977 年、176 頁。
- ¹³² 辰野隆『忘れ得ぬ人々』講談社文芸文庫、講談社、1991 年、213 頁。
- ¹³³ 大澤正道「探索・横田兵馬」、『初期社会主義研究』19、2006 年 12 月、98-107 頁。
- ¹³⁴ Piłsudski. Manuscript. Sygn. 4646, t. 4, s. 22.
- ¹³⁵ 鈴木裕子編『資料 平民社の女たち』不二出版、1986 年、31-32、269-270 頁。
- ¹³⁶ 『二葉亭四迷全集』別巻、125 頁。
- ¹³⁷ Piłsudski. Manuscript. Sygn. 4646, t. 4, s. 73.
- ¹³⁸ 『二葉亭四迷全集』別巻、125 頁。
- ¹³⁹ 『大日本正教会著訳出版図書目録』。山川令子「うえだすすみ 上田将」、『日本キリスト教歴史大事典』、162 頁。ちなみに、「将」を「ストム」と読む説もある。堀川柳人編『帝政ロシア邦文書目』非売品、1939 年、14 頁。
- ¹⁴⁰ 中村監修、前掲書、第 6 巻、221-222 頁。
- ¹⁴¹ 「上田将氏の永眠」、『正教新報』765、1912 年 10 月、17 頁。
- ¹⁴² Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Русселю). С. 19.
- ¹⁴³ Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Русселю). С. 21.
- ¹⁴⁴ Пилсудский. Письма в газету «Воля» из Америки и Галиции. С. 47.
- ¹⁴⁵ 和田、前掲書、下、114、156-157、206 頁。
- ¹⁴⁶ Piłsudski. Sygn. 4646, t. 1, s. 81-82.
- ¹⁴⁷ 同書の「凡例」2 頁と、堀川編、前掲書、14 頁を参照のこと。
- ¹⁴⁸ 中村監修、前掲書、第 4 巻、44、47、66、92、180、189、374-375 頁。第 5 巻、188 頁。第 6 巻、48、51、121、175 頁。第 7 巻、122-123、175、203 頁。第 9 巻、58-59 頁。
- ¹⁴⁹ Piłsudski. Manuscript. Sygn. 4646, t. 1, s. 80; 中村監修、前掲書、第 9 巻、「人名索引」7 頁。
- ¹⁵⁰ Piłsudski. Manuscript. Sygn. 4648, s. 8.
- ¹⁵¹ Письма Б. О. Пилсудского во Владивосток (1905 - 1909 гг.) (Из архива ОИАК). С. 367; Латышев. Указ. соч. С. 289.
- ¹⁵² Piłsudski. Manuscript. Sygn. 4647, s. 37-38.
- ¹⁵³ Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Русселю). С. 32.
- ¹⁵⁴ 『二葉亭四迷全集』別巻、157 頁。
- ¹⁵⁵ Piłsudski. Manuscript. Sygn. 4646, t. 3, s. 37-38.
- ¹⁵⁶ Piłsudski. Manuscript. Sygn. 4646, t. 5, s. 1.
- ¹⁵⁷ 「小川一真の帰国土産、広告写真燈」、『東京横浜毎日新聞』、1884 年 7 月 24 日。
- ¹⁵⁸ 『二葉亭四迷全集』別巻、162 頁。

- ¹⁵⁹ 『二葉亭四迷全集』別巻、114 頁。
- ¹⁶⁰ 横山、前掲論文、上ノ 215 頁。
- ¹⁶¹ 『二葉亭四迷全集』別巻、162 頁。
- ¹⁶² 桑原雷晏「魚山書屋雜記」、『東京人類学会雑誌』267、1908 年 6 月、332-333 頁。
- ¹⁶³ Пилсудский. “Дорогой Лев Яковлевич...” (Письма Л. Я. Штернбергу. 1893-1917 гг.). С. 265, 266.
- ¹⁶⁴ 鳥居龍藏『ある老学徒の手記』朝日新聞社、1953 年、40 頁。
- ¹⁶⁵ 「露国人類学者」、『東京朝日新聞』、1906 年 2 月 8 日、7 面。
- ¹⁶⁶ Пилсудский, Б. Письма Бенедикту Дыбовскому (1903-1912 гг.). *Известия Института наследия Бронислава Пилсудского*. № 3, 1999. С. 51.
- ¹⁶⁷ Pilsudski. Manuscript. Sygn. 4648, s. 47.
- ¹⁶⁸ 鳥居きみ子「蒙古行 道すがら (其一)」、『読売新聞』、1906 年 3 月 8 日、3 面。
- ¹⁶⁹ Pilsudski. Manuscript. Sygn. 4646, t. 2, s. 5-6; 鳥居きみ子、前掲記事。
- ¹⁷⁰ 「鳥居君子女史が蒙古王の家庭教師に」、『報知新聞』、1906 年 2 月 22 日。「鳥居龍藏、夫人の後を追ひ蒙古王へ」、『日本新聞』、1906 年 4 月 25 日。
- ¹⁷¹ Pilsudski. Manuscript. Sygn. 4646, t. 2, s. 81.
- ¹⁷² Pilsudski. Manuscript. Sygn. 4648, s. 37-39.
- ¹⁷³ 『日本地質学会史 日本地質学会 60 周年記念』日本地質学会、1953 年、31、39、45 頁。
- ¹⁷⁴ Pilsudski, B. Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore. Cracow: Polish Academy of Sciences, “Spółka Wydawnicza Polska”, 1912, p. XIV; The Collected Works of Bronisław Pilsudski. Vol. 2. Ainu Language and Folklore Materials, 1998, p. 16; 北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語勉強会訳「樺太アイヌの言語と民話についての研究資料〈1〉」、『創造の世界』46、1983 年 5 月、103 頁。
- ¹⁷⁵ Pilsudski. Manuscript. Sygn. 4646, t. 5, s. 1-7.
- ¹⁷⁶ 「ニシバ」はアイヌ語で「金持ち、主人、領主、長」の意。荻原真子（解説）、丹菊逸治（翻刻、訳注）「千徳太郎治のピウスツキ宛書簡-「ニシバ」へのキリル文字の手紙-」、『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』4、2001 年、213-223 頁。Сэнтoku Тародзи. Письма Брониславу Пилсудскому. *Известия Института наследия Бронислава Пилсудского*. № 4, 2000. С. 92-93; Sentoku Taroji's letters from Sakhalin to Bronisław Pilsudski (1906). [Translated by A. F. Majewicz], Ainu Language and Folklore Materials 2 (The Collected Works of Bronisław Pilsudski. vol. 3), 2004, pp. 726-727.
- ¹⁷⁷ 黒龍会編『東亜先覚志士記伝』下巻、原書房、1966 年、798 頁。南北海道史研究会編『函館・道南大事典』国書刊行会、1985 年、477 頁。
- ¹⁷⁸ Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Руссело). С. 28, 29.
- ¹⁷⁹ Руссель. Письма Б. О. Пилсудскому (1906-1907 гг.). С. 38.
- ¹⁸⁰ 『二葉亭四迷全集』別巻、162-163 頁。
- ¹⁸¹ Пилсудский. Письма Н. К. Судзиловскому (Руссело). С. 33.
- ¹⁸² 宮城勇『函館市街明細図附録 地所所有主明細鑑完』魁文舎、1903 年、40 頁。
- ¹⁸³ 稲川竹治「時局破裂後の露都に於ける水産界の片影」、『大日本水産会報』285、1906 年 5 月、3 頁。
- ¹⁸⁴ 稲川、前掲論文、3-11 頁。
- ¹⁸⁵ Дударец. Эпистолярное наследие узников сахалинской каторги (по письмам Л. Я. Штернберга, И. П. Ювачева и других политических ссыльных). С. 110.
- ¹⁸⁶ [大杉] 栄「大久保より」、『近代思想』1-9、1913 年 6 月、31 頁。大澤正道編「石川三四郎年譜 (第二版)」、『初期社会主義研究』18、2005 年 11 月、168 頁。
- ¹⁸⁷ 石川三四郎「亡国民の偉業」、『石川三四郎著作集』第 6 巻に所収、273 頁。
- ¹⁸⁸ 石川「ピルスツスキイの想ひ出」、282 頁。
- ¹⁸⁹ 石川「ピルスツスキイの想ひ出」、284 頁。